

史料紹介 森本州平日記（十二）

東京大学大学院
日本近代政治史ゼミ

はじめに

今回翻刻する森本州平日記は、一九三二（昭和七）年七月一日から九月三十日までの三か月分の日記となる。これに先立つ年の「史料紹介 森本州平日記」については、紙媒体では『東京大学日本史学研究室紀要』第二十三号所載「森本州平日記（十一）」まで掲載済みであり、また東京大学学術機関リポジトリ（UTokyo Repository）では同号まで閲覧できる（<https://repository.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/>、画面左のインデックスツリーで人文社会系研究科・文学部を選択の後、日本史学を選択）のでご覧いただきたい。

本号所載の日記の翻刻には、日本史学研究室の賀申杰、三村佳緒、章霖、塚原浩太郎、石坂桜、上西晴也、谷川みらい、桑田翔、太田知宏、太田聡一郎、栗田敦、森文実、渡部亮、飯島直樹の各氏（以上大学院生）と、安藤克真、大窪有太、山内俊、堀口志穂の各氏（以上学

部生）があたり、語句の説明には、三村、章、塚原、石坂、上西、谷川、桑田、太田知宏、太田聡一郎、栗田、森、渡部の各氏が調査の上で分担執筆した。最終的な文字の確定には、三村、塚原、桑田、太田聡一郎、渡部の各氏が特に尽力し、日記全体の編集と最終的な取りまとめは、大学院ゼミ幹事である飯島直樹氏があたった。

日記の翻刻にあたっては、漢字片仮名表記を漢字平仮名表記に改め、旧字体を新字体に改め、不明文字については□で表記した他、可能な限り原文に忠実に起こした。なお、ごく一部、個人の評価にかかわる問題を含む人名等は***等とした。

最後になりましたが、森本州平日記を、東京大学文学部日本史学研究室の学生・院生が自由に読み翻刻することを許可され、翻刻文について丁寧にご助言下さった、日記原本所有者で現森本家当主の森本信正氏に厚くお礼申し上げます。また、常に惜しみなく尽力くださる飯田市歴史研究所調査研究員齊藤俊江氏にも厚くお礼申し上げます。

（加藤陽子）

七月一日 金曜

曇雨。銀行へ出勤す。午前中聯合事務所に於て郡農会、産業部会、町村長会主催の農村不況打開の研究会有り。県より奥原主事来り平野氏の農林省大蔵省等へ農村の不況陳情の報告あり。其陳情の要旨は一、政府は通貨膨張政策を至急実施する事、小学校教育費国庫負担等数件ありしが、第一の通貨政策に付ては大蔵省の同意なしと報告ありたり。此の問題に關しては、如何に通貨を膨張するとも社界〔会〕不安が除去せられざる限り駄目なりと、予は平野氏等の前にて述ふ。併して農村負債整理組合の設立は相殺を以て区域毎にすれば相当の効あるべしとも説けり。併して午後銀行に帰る。尚午後も引続き聯合事務所に於て産米検査の農会主催の会議ありたるも之には欠席す。

午後より雨降りとなり降雨量多く各川増す。夜に入りて降雨愈々多く、天龍稀に見る増水にて堤防を乗り越えんとするもの、如し。

予記 苗代にイモチ病出来、泡混にして年凶を告げる如き前兆なり。

【語句の説明】①平野氏：県下選出の衆議院議員（政友会）、平野桑四郎か。平野（一八六四―一九三四年）は伊那郡栗矢村（現下伊那郡阿智村）に生まれ、一八九〇年以降、下伊那郡智里村村長、郡会議員、長野県会議員、同議長を歴任。一九三二年二月の衆議院議員選挙で長野三区（上下伊那郡・諏訪郡）から出馬し当選した。その他、組合製糸伊那社社長や長野県農会長なども歴任した。

②イモチ病：稲熱病。糸状菌の一種が引き起こす稲の病氣であり、稲の葉が変色したり、実入りに悪い影響が出たりする。この年、下伊那地方の南部では稲熱病のために水稲が全滅した場所もあったという。

七月二日 土曜

雨。夜来の大雨滯然として降り天竜増水甚しく、弁天堤防危きが如し。松川の出水は差程大ならず。朝起床。直に八ヶ島松川沿岸より弁天地方を巡視するに、弁天橋詰の所は堤防低ければ波乗りて溢れ出んとする気配なり。喜代来り伊藤長造の借屋申込を聞く。之を却下す。片桐法治の勘定に来るあり。併して後組合支所に行く。今日より製糸繰糸を始む。既に開繰式を終了したる後なり。本所に行く。統一社と契約して責任ある蚕種を供給せしむる目的にて統一社の蚕種製造を毛賀白木屋蚕室にて行ふ事となりて、之を監督に出張する積りなりしも銀行に支店長会議を召集しありたれば遅刻を恐れて銀行に出勤す。銀行の支店長会議に於て本行の総振のバランス状より貸付四百十万、預金百十万、其他資産を合して五百七十万あり。此内預金を支払、銷却を百万円すると仮定するも尚払込資本金は充分なり。又本期四万二千円の純益に揚みたるは各位の努力の贈〔賜〕と云ふへし。尚支店を上伊那地方に若干（四）を廃止する旨を告げたり。

竜門寺の布教伝導講に來り世話人会を開き同講の事に付次の如く相談す。今後は集金を平均割とす。掛金をせさる事。十七回より右の如くなす事とす。

予記 製糸始む。

【語句の説明】竜門寺の布教伝導講：布教伝道講では、無尽の集金・抽籤、絵画を抽籤・落札する余興、竜門寺への布施、達磨忌の際に達磨の伝記を頒布するなどの活動を行っており、無尽講と竜門寺信徒の親睦・レクリエーション・布教活動の場としての機能を合わせ持っていたものと考えられる。州平は一九三〇年一〇月一三日に布教伝道講世話人として警察に届け出ている。

七月三日 日曜

晴。組合へ行く。専務と二人にて蚕種製造を検分す。先づ田中句一郎宅に行き其製造状況を視察す。次で毛賀白木屋に於ける製造状況を見る。塩沢好人及佐々木武人二人にて主任となり製造しつつあり。組合本所に行きて部会より通達ありたる役職員手当給料支払の状況を報告す。役員は全部名誉職にして年末賞与金として受くる賞与金額を報告す。再び支所に歸りて小林又次郎より備前長船則光と称する長き刀を金八円にて買入る。素人が磨きたるものにて形はよけれども地肌あれ見悪し。然し金八円は安く、且小林又次郎が先般より買ひくれと頼み居たれば義理にて買取る。夕刻帰宅す。電燈付かず工夫を頼みて修理を加ふ。

増恵、伊沢オクミの誘によりて高遠へ灸据に行く約束をして、急き明朝出発の仕度をなす。今村政一年貢未納金九十二円七十五銭を百十七Bの預金にて受入す。昨日前沢俊三より送付してくれた江戸町屋賃六十四円半を渡し、又今村政一年貢金銀行預金の内五十円を父に渡す。受信 福島佐太郎。〔竹村〕信作。

【語句の説明】 備前長船則光：備前長船とは備前国長船村の刀工が制作した刀。俗に「長船物」と称されていた。則光は室町時代中期に同門で活躍した刀工。

七月四日 月曜

晴。午前中直に銀行へ出勤した。銀行業資本主義制度の転換期に於ける銀行業はイヤ／＼業に服して居るので、一日も早く此桎梏より逃れんと考へて居た。社界〔会〕不安―資本主義制の転換―国家主義共產主義―私有財産制限主義―君主権の財産に及ぼす主義―国家管理と

云ふ点迄此制度が転換するか。現今は産業統制が喚はれて居る。學者も口を開けは之を主張する。多分此れに向ふものであらふ。若し之れが行かなければ極端なる資本主義、此資本主義が確立せざる限り国家管理が徹底せざる限り、此社界〔会〕不安は一掃せられない。従て通貨は如何に膨脹しても農村は苦況より脱する事は出来ない。当分之れが続くであらふと云ふのが予の経済観である。

午後役場に村会がありて出席した。伊沢太十郎に対する慰労金問題が片付いた。投網に夜出かけた。鯉が二三本とれたのみであつた。

七月五日 火曜

晴。組合支所より銀行出勤す。銀行では午後から重役会が開かれ、早々小池氏か東京から来て重役会に臨んだ。此の日本経済救済策は農民に現金を救恤する事であつた。予は如何なる現金の救恤も無限でない限り此の社界〔会〕不安を除かなければ到底ダメである、通貨膨脹政策も社界〔会〕不安を除かれざる限り其効はないと説をなした。重役会は吉川井村両氏の出席の結果、株主総会に於ける問題等に付ては充分に研究し、中沢宮田片桐伝馬町等の各支店廃止の事も充分研究した。***か銀行へ来訪して、伊那銀行より債務の取立厳しく入担不動産を競売に付されそれが為に村税の滞納が配当加入となつて現れた旨を告げて、今後如何なる処置に出つへきかに付相談があつた。併し全財産を提供して尚不足すれば如何とも致し難しと告げた。彼は債鬼に攻め立てられて家財は皆とられ上伊那Bよりも差押をうけて居た。信也か帰宅した。東京の遊学生は時代の墮落を其まゝに受けて居る。東京辺で学資を多額使ふて遊学するの不可を感じた。

【語句の説明】 各支店廃止の事：一九三一年の支払い猶予後、百十七

銀行の再建が進められる中で、一四の支店のうち上伊那郡の宮田・中沢・片桐の三支店、下伊那郡の伝馬町支店が廃止された（三二年七月二三日の株主総会で可決）。州平は三二年一月時点で、特に上伊那郡に支店が多過ぎることを問題視しており、十分な資本金や純益の伸びを確認できた三二年七月二日の支店長会議でも「上伊那地方」の支店を廃止する旨が告げられ、九日に片桐支店が閉鎖された。

七月六日 水曜

雨。組合支所より銀行。組合にて塩沢来組して青物市場の事頼まれたり。木下光弥を右青物市場雇員として周旋し、同人来りて仕事に着手せり。出荷未だ多からざるも飯田商人来り買受け行くを見る。正午頃出勤したるに宮田より支店運動（存置）者数名来行したり。頭取之に面接せり。宮田支店、片桐支店の両支店は此際廃止する事に決したれば如何ともし難けれども存置運動あるは面白し。財界稍目鼻付き小康を得たるもの、如く、組合へも政府より一ヶ年支払の低資5%のもの八万円計り来りたり。午後より頭痛すれば何の心地もなく其の心地して銀行の事務を見る。国家重大時機に際し一般の人心他力本願を旨とし自力更生を策するものなく、満洲国の西伯利出兵の轍をふまさらしむべきに、一般国民生活に疲れたるか興国的の気分乏しくハリのなきには驚く。やかて日本も乱世に陥り、立て直すか或は之を以て自滅の境に入るか憂ふべき事のみなり。農村極度の疲弊にも自力更生を計るもの寥寥たり。嘆すべき世の中なるかな。

受信 福島佐太郎。

【語句の説明】 西伯利出兵：ロシア革命後、英仏米の連合国は、革命軍によりシベリアに追い詰められたチェコスロヴァキア軍の救出を

理由に軍隊を派遣し、革命に干渉した。大陸への勢力拡大を狙う日本も一九一八年八月に連合国側の要請に応じてシベリア出兵を宣言し、東シベリア・北満洲・沿海州などに軍隊を出動させた。しかし、十分な成果が挙げられないまま列国は一九二〇年に撤兵したが、日本は単独で駐兵継続させたため、国内的にも国際的にも非難を加えられ、二二年によくやく撤兵した。

七月七日 木曜

曇。午前九時銀行出勤す。組合支所へは行かず。太田時次郎来行し彼が所有せる銀行株を売度ければ買取りくれ間敷やとの話あり。暗に彼が株主総会に於て他より頼まれたれば総会ゴロを致す様な口吻なり。脅迫らしき口吻なり。価を問へは四百円なりと云ふ（旧10、新15を以て）。高ければマケよと云ふ。然るに彼は益々脅迫を露骨に云ふのみなり。遂に欠（決）裂す。後より電話にて百円にて売ると云ふ。然らば買取らんとの話成立す。原モト事件にて松下、杉山、及原守国来行し最後の示談出来、二万三千円を一万三千五百円にて示談せり。庚申講をなす。中原、丸山泰治、市場来る。先日の中合により魚類一、野菜料理二、豆腐料理にて祖先の土地開拓の苦心を談しつゝ、宴を開く。父も出て来りて飲む。元氣よし。

何となく堅くなりて他に融通性なし。予の寛広〔厚〕にして深沈と云ふが如き心境なきは修養を要す。

発信 桑山信太郎。礼、鮎不来。信作。

七月八日 金曜

雨豪雨。宮田支店へ事務引継の為午前七時出張す。原田てふなる婦

人の預金者来り預金を払戻せと強請す。強硬なる請求者なりと聞く。依て定期千円は其儘とし相殺に用ひ、残七百七十円は毎月十日毎に百円宛支払ふ事に約束出来たり。支店長の曰く宮田の商工会のもの本店より常務の来宅を待ちて先般出飯陳情の結果に付き返事を聞き度しと待つと云ふ。午後二時より面会すと告げて置けり。然る後代田を訪問し宮田村に於て支店存廢の価値と一般の空氣を問合せたるに左程にもなしとの事で、然らばとて転移の用意をなしたり。然るに午後一時赤穂より電話にて帰宅せよと申来る（大洪水に付）。取るものも取り敢ず宮田陳情委員に電話にて急用突発帰飯すべければ他日を期して話すべしとて、春日館を訪問したる後帰る。支店では清水正晴、広木某来行し数分面会して去る。引継を随僚木下に依頼せり。

予記 洪水天竜氾濫す。松川北河原堤防危し。天竜は堤を乗り越越へんとす。消防組出て、北河原堤防へ牛五ヶを入れたり。北川〔河〕原、八ヶ島、伊久間街道危し。各地に水害山崩等有り。

【語句の説明】①洪水天竜氾濫：一九三二年七月一日から二日、七日から八日にかけて長野県全域が大雨による災害に見舞われた。松尾村では二日に五五町歩の田畑が被害を受けた。また、松川北河原堤防は松川を隔てて隣接する上郷村との境に築かれていた。

②牛：水流を抑えるために木組みを石などで固定したもの。

七月九日 土曜

晴。妙前の二枚橋が雨洪水の為に北側の橋脚が破損したので地元の人金棒の連中が出て修理して居た。朝菅沼から島田井が決潰して昨日消防が出てカケ止の応急工事をしたか、此朝も現場へ出られたしとの事で片桐支店行を延はして菅沼方を訪問す。木下千之助居合せて、島田

井口が欠潰し他人の私有地を水を通すので数年前から年貢を出して（鼎半、島田井半）居たが不納であつたので此際地主から責められて前九ヶ年間の年貢を出す事、及此後の通水年貢として鼎村と折半して年拾円宛出す事を、新に契約すると云ふ件は金は出さずに権利は主張したければ何とか考へたるも別に名案もなし。調印して出す事となり。現場に臨むに島田井の土手伊那電線路東が欠潰し居り応急工事を施す。午後もマチの払場の下に蛇駕籠を入れる事とせり。予は午後欠勤して銀行に出行。直に片桐支店閉鎖に行く。前沢二郎方を訪問し片桐支店が永く世話になつた話と百十七銀行の内容に付話し、栄太郎より前沢家を合資会社となすの案に付説明を聞く。次て支店に至りて前沢岩夫を訪問して同しく支店の礼を述べたり。

午後四時半トラクにて飯島支店行。事務引継を了して夕食を行員と共にして、夜十時帰宅。

片桐村役場にも出頭して挨拶せり。

【語句の説明】蛇駕籠：蛇籠（じゃかこ）。河川の護岸工事や土砂崩れの防止などのために用いられる石材のこと。竹や鉄で編まれた籠のなかに石を詰めてつくる。その形状が蛇に似ていることが名称の由来だという。

七月十日 日曜

曇雨。父に前沢行の話等して朝組合支所に出張す。菅沼源七、木下千之助、市瀬久太郎等来りて島田井に付て欠潰応急手当費用の勘定并に鼎村及井口の地主と交渉を如何にすべきかに付て研究し、年貢は基本金より支弁し置く事及吉川亮夫と話して井口に完全なる工事を施すよう県へ要望する事に決し亮夫に電話をかけしも多忙にて面会出来ず。

井口の問題は後日に残し、勘定して組合より借金し当座の費用を支弁し置く事とせり。午後は松川関係堤防費勘定の為、丸山泰治、丸山幸治、猪佐雄来り（参集せしめ）、洪水に付応急手当を施したる材料代費用等につき勘定せんとせしに今村七三来らず。秋迄延す事とし、管理者を丸山泰治に囑託し堤防関係より贈せたり。丸山鶴弥の墓前に建つ花立に付丸山泰治に頼み、書類の引継を父より受けたり。ハケ島、松の木の本根洗はれたれば検分す。信也伊那電にて市内方面行。フサノ来りて仕事す。組合は午前中支所へ行きたるのみ。明十一日竜丘組合にて午前十時より地方組合会ある由なり。

【語句の説明】①菅沼源七：松尾村村会議員（一九一七～二五年）、上溝の耕地委員（一九一六～一九年）を務めた。

②木下千之助：松尾村議會議員（一九二二～二五、二九～三七年）、松川入山林組議員（一九三〇～三五年）などを務めた。

③竜丘組合：竜丘販売購買利用組合龍西館のことか。一九二〇年に設立。主として生糸製造加工販売業務を担った。

七月十一日 月曜

曇午後晴。組合支所に出張す。一巡視して後上飯し銀行出勤す。銀行の記事（更生近し）一般社界（会）の耳目を引き、預金の売買には今迄7.5を唱へしもの急に80〔8.0〕以下にては売買なくなり却つて整理かメンドウになる。

信作より謙一の出生祝として味付海苔を郵送し来る。

桑の発芽虫の被害にて悪しく夏蚕に大影響ありたり。

夕刻松川へ釣に行き三四尾を獲たり。投網も試みたるも其成績よろしからず。

社会の今日 国際連盟支那調査団再来し、陸相外相共に立派なる声明をなす。吾意を得たり。

【語句の説明】国際連盟支那調査団再来し、陸相外相共に立派なる声明をなす：一九三二年七月六日に外務大臣へ就任した内田康哉は、同日の記者会見で満洲事変収拾への抱負を語った。「外相」の「声明」とはこれを指すと思われる。荒木貞夫陸軍大臣は九日に調査団と会見し、日本の自衛的措置や衆議院における満洲国承認決議は日本と満洲との歴史的・思想的な関係の深さによるものであり、手を引くことは道徳上許されない、治安の回復まで撤兵は不可能などと主張していた。

七月十二日 火曜

晴。組合本所より上飯す。組合本所に青山を呼ひよせ、バランスを見て指示をなす。時々政府よりの借入金で以て組合の金融を付けるべく計策し着々其緒に付く。其指示は次の如く、信聯貯金を以て中金借入金二万円を支払ふべし、未収入金を整理して甲号貸付に転向せしむべし、バランスは極力縮小すべし、奉公貯金の一部は払戻しても可なり、減債貯金は集金を早くやるべし。

正午銀行出勤す。午後六時退出す。隣宮内払物をなし所有品全部を売立てたり。公金費消の罪により収監中。

木下に命じて未収入利息の多き支店に対し其収入を迫るべく通報せしむる事とす。

釣に行き六尾を獲たり。

暑気大に加る。

【語句の説明】減債貯金：減債積立金のことか。社債の発行主体（今

回の場合は組合）が、債権の元金を償還するため積み立てる資金のこと。社債の償還にはまとまった資金が必要となるので、あらかじめの準備が必要となる。償還用の資金を積み立てることによって元金償還を保証し、社債の市場価値を高める効果もあった。

七月十三日 水曜

晴。組合支所午前中事務を監視す。正午銀行出勤。

総会前に頭取は頭をなやまして居た。併し委任状を蒐集してしまへは別に何の心配要しないと献言した。

七月十四日 木曜

晴。組合支所へ行つた。十一時頃迄支所の状況を視察した。吉川會計も来て居た。バランスの善くなつた事も話した。それから屑物者がつめかけて屑物の売約をしてくれと迫つた。東洋紡績の買込に対する対策として、あつた。

銀行放課後上柳緑に乞はる、まゝに姫城館へ行つた。夕食をとりつ、彼の家政上の話を聞いた。敏雄か脳が悪いから貴君か眼を光らし監督を要する旨を告げた。隠居はよろしくない。宝物は百十七銀行で御預りする。保護。千代田商會に付ては何れ召集して社員に謀りたる上開〔解〕散するか又は之を改めてやるか決する事等を打合せた。伯父は上京の話や雅斜〔叙〕園のよかつた様な話を細々とした。予は少し組合の方を強くやらなければならん。

【語句の説明】①東洋紡績：一九一三年、渋沢栄一の提言により三重紡績と大阪紡績が合併して東洋紡績会社が設立された。三一年には大阪合同紡績を合併して世界最大の紡績会社となつていた。

②雅斜〔叙〕園：雅叙園は、東京府下の芝浦と目黒に店舗を構える「日本支那御料理」店。特に一九三一年に開店した目黒雅叙園には一万数千坪の庭園も存在し、様々な催しが開催された。

七月十五日 金曜

曇。朝の内噴火の爆発の如き大なる爆音を聞く。父に朝上柳緑と姫城館に会見の話や宮*が債鬼に責められて苦んで居る話等をした。それから銀行へ出る。頭取がおん出し山の麓へ堤防を造る事を主張し、工区に当つた話等もあつた。併し之れは進んで百円を投じる気にはなれなかつた。吉野の小児か死んだと聴いて御見舞とて金一円を小使をして北村に頼んで置いた。

町は祇園で賑であつたと云ふ。飯田から歸りて釣に行く。十尾を獲たり。

敏子が来訪して泊つた。木下喜吾次が来訪した。予は会見せず。

銀行へ石原が来訪して塩春より担保付田地を買ふた話があつた。

政府では農村救済の種々な政策が講じられる。併し吾意を得たものは少ない。

発信 信作。昇平。

社会の今日 内田外相、満洲国承認に付て日本の決意を語る、連盟委員に。

【語句の説明】①農村救済の種々な政策：一九三二年七月一五日時点で、農林省の農山漁村土木事業、内務省の救農土木事業・地方財政調整交付金等の予算が大蔵省に回付されていた。同年八〇九月の第六三臨時議會は救農議會と呼ばれ、翌年までに負債整理、米価政策、救農土木事業、農村経済更生計画からなる諸政策が成立した。

②内田外相、満洲国承認に付て日本の決意を語る：一九三二年七月一

二・一四日に、内田康哉外務大臣とリットン調査団との正式な会見が行われた。一四日の会見では、調査団が日本の満洲国承認は九カ国条約や連盟規約に重大な障害を与えると警告したが、内田は満洲国独立が民族自決に基づくものであり、既に独立した国家を自主的な判断を以て承認することは条約に違反しないと反論していた。

七月十六日 土曜

小雨。組合より銀行へ出勤す。日常の事務よりも組合の事務は之を如何にすべきかの大綱にあり。意は常に農村問題に在れども銀行へ立入りたる為今更銀行より逃避する事もならず。如何にすべきかに付て困難の立場にあり。銀行は退いて組合に立帰るべきが予の一生の進路として必要にして且又予の進路たるは明なるも銀行に入りたるは大なる間違なりし。併し一端(旦)入りたる上は其の職責を充分に果して後帰農して産業組合の為に尽すべきが予の大方針なり。

予記 農村不況救済陳情隊上京す。苦々しき事なり。

【語句の説明】農村不況救済陳情隊上京す：一九三二年春以降、不況の深刻化を受けて政府・議会に対する農村救済陳情・請願運動が盛り上がりを見せた。本記事に登場する「農村不況救済陳情隊」の具体相は不明であるが、前日一五日には長野県下の農村救済請願運動を先導した北信不況対策会が第六三議会に対する「第二次請願」の実行を決定するなど、当該時期においても各集団による陳情・請願の動きが継続していた。

七月十七日 日曜

曇。組合へ行く。午前中島田井視察の為菅沼、木下、塩沢広太郎、一瀬久太郎と工区主幹、吉川村長を伴ひて切石より其取入口を視察し其の川底の低くなりたるを工作物を造つてもらふ事に付、工区主幹に見せ、大袋集材所に到りて予等は帰り、第一工場に行きて事務を見て後横浜行の為帰宅し午後八時廿八分飯田発にて夜行出張す。車中牧野鼎組合長と同席す。

松沢数一の行動に付て組合側より批難の叫大なりと聞く。

【語句の説明】①塩沢広太郎：松尾村村議会議員（一九二三～二二年）、松川入山林組合議員（一九一二～二七年）などを務めた。

②牧野鼎組合長：牧野貫二。鼎村学務委員（一九一七～三二年）、鼎村会議員（一九一七～三三年）。

七月十八日 月曜

曇。午前七時牧野、片桐、(大正館の連中)等と共に横浜着。直にカドヤ旅館に入る。青山午前九時頃来訪す。午後より奥村商店を訪問して後三井物産に入りて西川氏に面会し(吉田氏不在に付)、直接生糸を三井に持込むから買ふてもらい度いと話す。永島等に面会す。暫くにして吉田氏来り之に面会して用件を話す。其用件は(一)国立検査により従来程の仲買の要なきに至りたる事。仲買人の信用湧川、日蚕等の破綻により不明となり危険となりたる事。県の糸聯出荷の圧迫急となりたる事を告げて直接取引を頼む。吉田氏も之を諾す。予は日本生糸が其の方法を以て上郷、吉田、神稲、大正館等の生糸を取扱ひ居る事を告げて三井物産の之に尽力方を促す。

神栄を訪問して後、田舎家に奥村、神栄両店の召待に応じて行く。

夜再び料理屋へ二次会に立寄りて十二時帰宿す。

【語句の説明】①日本生糸：横浜生糸合名会社の系譜を引く商社。一

九二四年に三菱の出資で設立され、生糸輸出量では三一年度に一四三、八四三俵を輸出して三井物産を凌ぎ第一位となるなど、昭和期の蚕糸業界に大きな影響力を有した。一九三六年に三菱商事と合併。

②大正館：一九一四年二月、有限責任山吹村生糸販売組合として設立。組合員は山吹村を中心に、近隣の大島・市田・河野・生田の四ヶ村からも加入した。下伊那地方では一九二〇年に伊那社が発足したが、大正館は伊那社に加盟せず、四一年の蚕糸業統制令によって下伊那生糸販売組合連合会「天龍社」に加盟するまで、独自経営を行っていた。一九三〇年代前半の昭和恐慌下では、多条機などの設備投資を積極的に行っていた。

七月十九日 火曜

曇小雨。かたや旅館に泊す。朝安井再び来訪し、彼が仲買人として新生面を打解〔開〕したきに付是非任せてもらい度由申来る。新〔神〕栄の小菅を介して安田横浜支店に中島繁造を訪問し、二十年振りにて彼と面会す。将来の交誼を頼みて会談甘分計りにて辞す。前支店長宮崎繁三郎とも親交あり、予の来浜訪問に付彼に申伝へを頼み置き。生糸検査所に青山と連行して奥村店員の案内にて出張せり。併して再検査を見たるに拝見に於ては全部合格し何の支障もなし。午後二時横浜を辞して途中大井町下車して塩沢某が村より逃げて大井町戸越に居るを訪ねたるに路上にて幸に彼を発見し、土地譲渡書に調印して返送する様告げて其承認を経て帰る。電車中に手提袋を忘れたる青山の件あり、幸に東京駅に遺留品として存在せり。丸ビル内の書画骨

董品売却の市を見物して其前にて青山と分れて予は白木屋に到り買物して駿台荘に入らんとせしも囊中欠を告げたれば夜行帰宅するに決し、神田にて買物して新宿に出て午後十時四三分発にて帰途に付く。

【語句の説明】宮崎繁三郎：前安田銀行横浜支店長。一九三七年、取締役に就任。

七月二十日 水曜

晴曇小雨。朝六時辰野に着く。箕輪屋に入りて朝食し、辰野支店に小原を訪問し金五円を借りて支店の模様等を聴取して午前九時伊那支店に來り、加納支店長より未収入利息の徴収の状況等を聴取し、正午本店に帰る。関島余四郎来訪し、千代田商會に付解散するより外なしとの話あり。之を他日会社の社員總會を開きて解散の手續をとる事に決したり。次て山本父來行したれとも組合より通知あり。県より役人視察に來りたれば來組せよとの事及口挽終了式に參列せよとの通知で直に歸り、慰勞の茶話會をなす。夕食と宴を催して夕刻帰宅。多忙なる日なり。宮沢彌来訪する由なりとも多忙なれば断る。

七月二十一日 木曜

晴。暑氣増し暑中らしき気分なり。午前九時出勤す。銀行へ行く。〔中略〕百十七Bより勸銀の競売を申請してやるから百十七Bの方へ何とか負債を支払ふ様心配すべしと告げたり。午後は仕事も書類を検するのみにて終了したり。帰途三原屋に立寄りて久が庭の松を手入せるを見て帰る。倭志雄は無断之れに住居せるもの、如し。帰宅後信也に何を卒業後する積りかと問ふに、農林省へても入りて官吏となる積りなりとか、雑誌記者となる積りなりとか云ふ。之を聞いて驚く。近

来の学校教育は誤れるも甚し。退いて帰宅し農を本業として進む事を告げたり。

予記〔前略〕西村田屋にて縁と面会、千代田商会にて会社の会議を開く可しと話す。

社会の今日「何時如何なる事が起るか知れず」と云ふ様な不安気分なり。

七月二十二日 金曜

晴夕立。朝組合支所へ行つた。口挽か本日終了するので江塚氏に頼んで置いた。

第一回の奥村出荷C格で五百五十円にしかならんと聞いた。工場へ東京の検査の状況を話して注意を喚起して置いた。それから上飯、銀行出勤。小池寛がやつて来た。明日の総会対策に付て打合せしたけれども別に各案にも見るべきものなく、要は株主の質問として(一)未払込をとるや否や、(二)預金の売買をなしたるや否や、其利益は如何にせしや、(三)重役の責任は如何にするや、等の事あるべし。委任状は殆んど過半数集めたれは何の心配もなし。放課後行員の賞与金を包む。

林七六貴族院選挙にて来行し、頼み、午後五時より仙寿楼に於て宴あり。大平、松下、林、池田、代田等と一所に出席す。

暑中見舞に手紙をうけたる所へ出す。

【語句の説明】①口挽：解舒のしやすさ、糸量の多少、糸質の良し悪しなど繭の品質を判定するために、原料荷口から繭を少量取り出して繰糸試験を行うこと。

②林七六：一八七五～一九五〇年。諏訪郡平野村に生まれ、一八一九

年諏訪郡会議員、二四年長野県会議員等を経て、三〇年衆議院議員(立憲政友会)。家業として継承した清酒製造業などを営み、三二年当時長野県で第十四位の多額納税者であった。三二年八月～九月貴族院多額納税者議員。後に岡谷市議会議長や岡谷市長も務めた。

七月二十三日 土曜

晴。銀行の総会の日。午前八時半出勤す。各支店長参集して九時より一時間遅れて支店長会議開かる。頭取の挨拶に続いて予も一応の挨拶をなす。其要旨は難局に際しての労苦を謝し猶一層の精勵を望む、報ゆる所少なきこと、益金を銷却に当てた事、此後の財界は予想も許さぬ事、従て困難は一層深酷なるべし、等説く。総会は頭取の出来余り宜敷からず。総会後賞与金報酬金を渡して後、仙寿楼に重役及両支配人を連れて小宴を張る。行員には酒肴料を渡す。

此日南信新聞重役会開かれたるも欠席す。重役の選挙ありたり。

銀行の総会には定款変更あり。宮田、片桐、中沢、伝馬町の四支店を廃止することとせり。

天気晴れ渡り暑氣一層甚しくなる。

稲作イモチ病発生す。

七月二十四日 日曜

晴。組合に出勤して事務を見る。神栄会社より岡部来訪して支所にて面会す。別に用件なければとも親交的に來れるなり。

財界不況と人心の悪化は愈々深酷化し来り。郡より平野が先鋒にて小西、原、県議等出京して農村救済を上司に訴ふる由にて出発し、政民合同にて出発せる。農村救済は各新聞其他一般に受けはよきも、皆

他力救済を叫び自力を以て更生するの案を建てるものなく、従て上司、政府に縋りて救済を乞ふ。一般の国民の氣風憂ふべきあり。自ら更生を計り自力を以て自己の再生を計り堅忍不拔此世界的不況を打解せんとする勇氣が国民に欠けたるは憐むべく憂ふへし。郡の政民両派共に人氣取りをなして、自力更生を大衆に自覺せしめんとする政事家なし。満洲出兵も此国民の氣魄にては或はシベリア出兵の轍をふまざるかと考ふる時祖国の将来更に憂ふべし。

関田齒科医に形をとりて帰る。

【語句の説明】①郡より平野が先鋒にて小西、原、県議等出京：これに先立つ七月一八日、不況打開策協議を目的として開かれた政民兩派主催の下伊那郡郡民大会にて、政府低利資金元資償還の五か年延期、肥料国営実現、義務教育費全額の国庫負担など六項目の要求が議決されていた。平野桑四郎代議士を中核とする委員らは、郡民大会の決議を携えて上京し陳情活動を展開した。

②関田齒科医：松尾村在住の齒科医師関田貞治のことか。

七月二十五日 月曜

晴。快晴にて暑氣甚し。組合支所に行き、専務と共に連合事務所を訪問し（産業部会よりの通知により）県より低資借替資金の話を聞く。召集をうけたるものは鼎、下村、大下条、智里等の諸組合にて何れも悪組合のみなり。依て或は組合の本質に於て注意をうけるに非ずやと思はれしに、単に松尾組合としては二万円の十年賦貸付資金を貸してくれと云ふ事なり。依て経営改善計画を建て、出す事とし、借入る、事にした。松沢及部会久保田兩人出席せり。松沢には彼を排斥の聲高まりつゝある旨を窃に告げ其態度に忠告をなしたり。

銀行出勤午後一時。北原源三郎電話にて予を呼ひよせ三原館樓上に於て午後五時面接す。北原団蔵も来り。国光社の跡始末之話あり。之れは明日銀行にて面会すると何の返事もせず帰る。三原屋によりて裏庭園の樹木手入れの状況を見て帰る。組合にては工場課長来場すとて電話来り。午後五時半行たるも来らず。田中句一郎を頼みて出勤せしめたり。

上柳緑を呼ひて報酬利子へ入れしむ。

予記 吉川村長水神橋架橋の勞に對し下上久堅と松尾一〇〇にて功勞賞として金盃一箇を贈る事とし其贈呈式ありたるも欠席す。福住によつて命名を話す。生児に民子とつけたり。

【語句の説明】国光社：長野県の製糸会社。

七月二十六日 火曜

晴。組合支所に行く。糸聯より飯島氏來訪して糸聯出荷を慫慂をうけた。依て午前中彼と話して午後共に上飯す。午後二時銀行出勤せり。北原団蔵及北原源三郎国光社と銀行との關係に付出行し面会せり。其の要旨は土地入担品に付入担土地抹消を逃れるものなり。併して之か説明を神戸生糸の來飯を契機として解決すべき旨を告ぐ。宮＊來訪して父と話して行く。予は歸來して十分計り面会せるのみなり。彼も家財の整理と納税の領収書を問題とし苦況に在り。

【語句の説明】神戸生糸：一九二二年五月、神戸商業會議所において川西清兵衛、松方幸次郎等が發起人となつて神戸生糸会社が創設された。一九三二年には神戸生糸輸出商組合が結成された。神戸取引所蚕糸部では、商工省の認可を得て同年八月以降神戸生糸の單位が改正された。

七月二十七日 水曜

晴。暑氣甚しく四十七年振りの暑氣なりと云ふ。草木枯死せんとするものあり。父が弁天を巡視して改修中なる道路を檢分せんとて伴して出かけたり。弁天松森の松の木二本はかり道路のジャマになると切り取る事に付、道路委員等と接〔折〕衝す。中島及猪佐雄来りて交渉するに、父は二本と杉五本と合せて三十円位を主張し、評価人を挙げて評価せしむることしたり。一巡して後余は関田齒科医へ入歯に行き下門歯を一枚入歯の補足をなし、直に上飯、福住の横浜にて生れたる嬰兒の命名を頼まれたれば、其名を民子と命名したり。福住文雄を呼びよせて渡す。勸銀の支店長交〔更〕迭し挨拶に来る。依て之に対して送迎会を飯田同盟会に於て行はんと其準備をなし、勸銀の当番に代りて両氏を勸銀出張所に訪ひて、仙寿楼に於て午後六時より送迎会を行ふに付出席を乞ひて出す。予は百十七Bを代表して出席。吉野が銀行へ来て猶興社の払込をしてくれと申込んだ。五円宛月賦て出すと云ふた。

【語句の説明】 勸銀の支店長：七月一六日付で日本勸業銀行松本支店長・佐藤賢治が長野支店長に転任し、その後任に立花定民が就任していた。

七月二十八日 木曜

晴。組合で蚕種家を巡回して秋蚕の母蚕を巡視した。甲乙両班に分れて一班は青山と江塚とか上の方を廻った。予と田中と熊谷とは下の方を巡視した。明から毛賀、城に及び巡視したが二三のものは不良であつた。午前中は之れに費へたので、午後は銀行を休んで遂に銀行へは欠勤した。組合で信用程度表作製に関しては予と一瀬と相談して作

製せしめた。原案に付て青山が不賛成の意を以てかゝつて来た。予は之を笑ひふくめて笑殺せんとしたが、彼の語氣が荒いので予は之に對話した。遂に青山を説服したが彼は不服であつた。

山口福治と鮎沢が夜分になつて来訪して江戸町借家人の惣代たと云ふので、屋賃を好景氣の時の五割五分にマケてくれと申込んで来たので、対して個人的の申込ならば一円宛割引くことと、若し借家人を団体として申込ならば全部完納出来ないから割引は出来ないと申渡した。彼等は其由を借家人に告げると云ふて帰つた。

七月二十九日 金曜

晴。暑氣が続く。九十度以上の日のみである。暑氣て人はあへいて居る。組合へ出張した。昨日専務と信用程度表の事に付て議論したので、青山も氣振つて出て来ないかと思ふたが出て来た。糸格がD格てよくないので注意を与へた。併して本所へ行つた。正午の休憩を利用して女工に平均賃銀三十二錢最低賃銀十八錢と決して、今後七月より之を実施する事に決した。氣の毒だが此不景氣の折柄了解してもらい度いとの話をした。専務も之を話した。それから正午開かれた信用評定委員会に望〔臨〕んで原案（払込済出資の七割、固定的預金との合算額を以て信用程度とする事）を示して一場の話をした。外に質問としては貸付はしないのかと云ふ様な事のみであつた。之に対しては貸付は当分出来ない、購買品は現金主義であると答へた。

よく了解して組合の苦境も知つて原案通り決定して解散した。それから銀行へ出勤した。午後三時である。吉田の宮島組合長に会ふて伊那社不出荷組合の納涼会を開く話をした。再び組合支所へ来て本所と同様の話をした。

【語句の説明】①吉田の宮島組合長…宮島豊治。下伊那郡市田村吉田信用販売組合信陽館の組合長を務めた。

②伊那社不出荷組合…有限責任下伊那生糸販売組合連合会伊那社は、一九二〇年に下伊那郡の二四製糸組合で設立されたが、その内部は各工場で生産した生糸を伊那社に出荷し伊那社の商標で販売する出荷組合と、単独で直接商社に出荷する単独出荷組合（不出荷組合）に分かれていた。昭和恐慌下、伊那社の経営改善のため伊那社への全額出荷が唱えられたが、単独出荷を有利とする比較的大規模な組合から反対の声が上がった。州平らの松尾村組合は最後まで反対した三組合のうちの一つであったが、長野県の斡旋を受け、一九三二年から系統機関である大日本生糸販売組合連合会に全額出荷することになった。

七月三十日 土曜

晴。午前中銀行出勤す。午後二時半退出す。子供暑中休暇始まり養蚕の手伝に勤労生活を修めしむ。養蚕夏蚕110×105二枚にて飼育し五令期となりて三十枚計りなり。トース桑ある為め子供の勤労生活を修めしむる目的で飼養す。組合には久保田良一來組して組合経営改善案を作製指導の為來組し、之れと打合せして午後二時半より組合本所に出張す。組合の改善計画として数字の羅列あり。貸付金の年賦償還計画を立てしむ。償還せしむべき計画は立つことか容易なるも、之を実施せしむるの方法に至りては六ヶ敷しくて之を如何とすべからず。果して之を組合員に強要して効を奏するや否やは疑問とする所なり。財界不況の際之を如何にするかは充分考慮を要する処にして、却て之を悪化せしむるや否やは実に危機であり、断行することありとせんも組

合員が其つもりとなつて働かされは、如何とすべからざるものなり。久保田は案を作りて去る。釣に行く。僅に五、六尾を獲たり。弁天道路を作り松森の二本の松、杉五本を、道路請負者猪佐雄に売ったり。〔欄外〕小池寛氏満洲関東軍財務顧問として就職す。

予記 松杉を売るに付ては父之が交渉に当り、代金廿円を助役をして口を聞かして漸く代金廿円と決せり。

発信 田中弥助。小松茂治。暑中見舞。伊藤乙市。

【語句の説明】①トース桑…桑株の下の方から出た、細々とした桑の木のこと。

②久保田良一…一九〇三年長野県生まれ。尋常小学校卒業後、組合製糸や飯田町信用組合（現在の飯田信用金庫）の書記として勤務し、二八年に産業組合下伊那郡部会に引き抜かれた後は組合製糸工場や信用金庫の経営や事務指導を担当した。経営合理化のため組合製糸を合同した天龍社設立にも尽力した。四一年以後は県庁に移り戦後にかけて秘書課長や財政課長、出納長を歴任し、産業更生事業などに携わった。

③小池寛…この当時郡山合同銀行常務取締役を務めていたが、関東軍特務部に転じた。特務部では取引所問題などを扱った後、満洲電業会社に移った。

七月三十一日 日曜

晴。午前中子供等を相手として前庭の掃除をなしたり。木下文雄、父の招に應じて来訪し父より小言を言はれたるもの、如し。父も近頃体の不自由から心イラ／＼すると見へて、家族を怒りとばし食物の小言を云ひ手におへず。吉野来訪して愛国勤労党に付き左の改正案を出

す。即ち勤労党は既成政党の代議士にても同主義を有するものは仲間に入れ議会に頭を出すこと、若し然らざれば吾々の主張は既成政党の為に横取せらるべし、併して常に院外団の如き観を呈すべし。

信濃国民新聞猶興社の資金十円を出資す。合計金六十円を出す。

吉野去りて後、午後鋤柄忠次郎夏蚕視察の為来訪す。

午後二時組合支所に行き、午後五時迄居りて製糸部を見て帰る。

釣に行く。落付きある身体となるを要す。自ら思ふに近來ウカ／＼して落付なし。依て重厚なる態度を持する様、自重することにつとめざるべからず。「榮へ行く道」を読む、面白し。

稲に「イモチ」病出来たり。

【語句の説明】愛国勤労党：一九三〇年二月一日に結成された国家主義政党。不況の深刻化により政民両党が協同して経済政策を唱え始めると、それまで民衆の経済的救済を主張の一つとして既成政党との差別化を図っていた愛国勤労党は、選出勢力との提携を模索する必要に迫られることとなった。

八月一日 月曜

晴。90。稀有の暑氣続く。四十七年振りなりと云ふ。夜暑苦しき事あり。銀行出勤す。

小池寛閑東軍財務に就任し不日、任に赴く為頭取面会し久し振の挨拶して刀鍔大小一腰を贈りて銀行顧問の礼を述ふべく上京せり。

夏蚕二十瓦計り掃立五令五日目にて信也尚夫等養蚕せり。尚夫中学の英語成績不良の為受持教員より注意あり朝夕勉強せしむ。信也をして教授せしむ。

飯田地方日中九十四五度になり暑氣甚し。

父身体不自由にて怒り易くなり家族の者共を怒り付ける事屢々なり。帰宅の上釣に行く。五六尾を獲るのみ、雑魚の繁殖少し。

【語句の説明】五令：蚕児が四回目の脱皮を終えた状態を示す養蚕用語であり、「五令五日」はその状態の五日目の状態の意味だと思われる。なお、「掃立」は、孵化した蚕を羽簞などにより蚕卵紙から蚕座に移動させ、桑葉を与えて飼育すること。

八月二日 火曜

晴。風あり暑氣続けれども凌ぎよし。組合支所に行く。専務及江塚と話して工場を一巡して見る。白甘一中相場上騰し白十四中はD、C格なれば之を恢復すべく市価より見るも採算よろしからされは廿一中を繰糸する事とし三日より之を改正する事に青山をして下令せしむ。十一時辞去して上飯す。聯合事務所で作興会に付事務打合をなす。県より教化団体聯合会大会ありて（来る八月十日）之に出席する事及之に對し提出問題として「如何にして国民精神を作興すべきか」と云ふ問題を提出したらんにはと考へたり。偶ま中原に会いて、満蒙問題を亜細（西伯）利出兵に終らしむべからず、国論を喚起して満蒙問題を解決如何か国民の生死の岐路であるべき事を知らしむべしと論せり。銀行出勤正午なり。

西上柳を訪問して保険事業の会計検査をなし社員総会を開きて大平の社長を辞したる件其他今後如何にすべきかに付協議せんとする総会を開く事を申合せたり。

前沢俊三来行し江戸町借屋賃集め来る。

八月三日 水曜

晴。雲行雨を思はしむ。涼氣出す。

組合支所に行きて監査簿の処理要項を作製し之を県に呈出すべく市瀬に命ず。中央金庫より検査に来組すとて計算等総て用意をなす。白廿一中相場よく其の繰糸を開始せしむ。

白十四中は皆C、D格にして予想よりも糸格よろしからず。何とかして之を矯正せんとするも現業員研究心なく之を如何ともすべからず。正午銀行に出勤す。

放課後上柳***を召して来行を求め千代田商会帳簿を持参せしめて計算を検査するに、帳簿沢山あり彼が頭腦の極めて悪しく見込なきを感知せり。

伊那社不出荷組合会吉田組合主催にてダサラ喜楽に開かれ突然其の通知に接して出張す。三井物産直送の件に関し各組合の意を探りしが鼎、下久堅等二三のもの之を認むるも他には従来の関係上賛意少し。予記 夏桑高し。一貫目カキ桑十二三銭。

【語句の説明】ダサラ：下伊那郡市田村（現・高森町下市田）にある地区名。漢字で「出砂原」とも表記する。

八月四日 木曜

曇小雨。小雨あり。雲の往来雨近くなるを思はしむ。風吹き涼味来る。

組合本所行、三井物〔産〕と以前直送に関し打合置きしものを更に先方より其成行に關して催促あり。役員会にて講究中の由を答へて置けり。午前十時上飯、銀行に出勤す。頭取正午頃帰行せり。東京山口の件、小池氏の件等を聴取せり。猪佐雄当行預金千円を買入れ之を

弁護士に托して取立てんとせるを以て、之に対抗策を講ずる事とす。

上柳敏雄を召致して千代田商会を如何にするかとの話をなし、計算を検査すべく予定せり。併し彼駒場に行きたりとして来行せず。

養蚕上簇を了せり。玉置勝人より山本猶興社支社に就き山本赤化連中の盲動を報し来る。

野溝勝来行し金員を請求あり、池上銀三郎の件につき。

【語句の説明】①上簇：繭を生成する時期になった繭を簇に移動させること。

②山本猶興社支社：森本州平・中原謹司らが主催する猶興社の山本村支部。玉置勝人は、猶興社の関係者として前年より山本村で活動していた人物。

③野溝勝：一八九八～一九七八年。長野県出身の政治家・社会運動家。一九二六年社会民衆党に参加、以後同党の南信支部長として地域に支持基盤を構築し、途中党籍を剥奪されるなど紆余曲折を経て、一九三一年には長野県会議員となる。その後は社会大衆党の幹部となつて国政にも進出し、一九三七年の総選挙では長野三区から出馬して当選した。

八月五日 金曜

晴。涼味加る。組合支所へ行つた。青山と減債貯金を如何にすべきかに付督促して之を実施せしむる事、役員会を開くべき事等につきて相談した。午前中は組合に居た。

午後上飯、銀行出動した。放課後聯合事務所に作興会役員会を開いた。会するもの小西、女学校長、代田、北原、中原と予か出席した。談は農村不況の陳情上京委員の話か小西氏からあつた。予は此陳情程

無意義なものはないと思ふた。

来る十日東京で開かれる全国教化団体聯合会に付議すべき議題につき研究したか別に良問題もなかった。「如何にして国民精神を作興すべきか」と云ふ問題は常に念頭を離れざる問題であつたが、現下の国民の思想、財界の不況は愈々悪化するのみで、満洲国の日本国民發展の方法に関しては一般国民無関心の様である。国論を喚起して出征軍人の後援をなし、満洲国を大和民族發展の足場となさん事に全力をそ、かねはならん事は予は持論であつた。之を予は提議したが結局別に問題はなかつた。

八月六日 土曜

晴。組合へ行つた。支所に午前中居て種々の用件を講じた。塩沢治雄と面会して松尾村耕地面積作付反別、一戸平均作付反別、其収支等につき研究を依頼した。併して此農村不況を如何にして打解〔開〕するかに付研究の材料とした。蓋し結論は人口問題に帰する。松尾村六千五百人の人口は過剰である。此人口を如何にしてウスクするかの問題である。経済調査委員会が開かれても之より外には出てないであろう。

正午上飯、銀行出勤した。午後四時上柳敏雄を捜して千代田生命保険会社の計算を調査した。現金九百円余の内一文もなかつた。彼から始末書を調して後日の証として終つた。

安田銀行大滝氏と浮田氏との交迭があり、其送迎会を銀行団か仙安に於て開いた。之に百十七より大平と予が出席した。

午後十時開〔解〕散した。

【語句の説明】 安田銀行大滝氏と浮田氏との交迭：安田銀行の飯田支

店長が大瀧安三郎から浮田秀樹に交代した。浮田は一八九二年生まれ、父は政治学者・浮田和民。一九一四年早大商卒業、二一年安田銀行入行。

八月七日 日曜

晴。午前七時組合役員会を開催して支所に於て開いた。「組合経営振興計画に付て」生糸出荷問題（三井へ直送する事、糸聯へ出荷の事）に付て及飯渡金、従業員給料引下等について相談した。午前中此相談に費へた。監事も召集した。午後には養休^{ヤウキウ}をして帰宅した。小憩の後上飯、三宜亭に於ける宮井隆治帰省に付歓迎の座談会に出席した。宮井は永く大連に居て満洲の事情にも通じて居るので、其の満洲の情況に付て種々の質問があり応答があつた。支那人苦力を一万人も使用して居るので支那人筋肉労働者の話があつた。関税撰取問題に付ても話があつた。曾て満洲行の後、十数年振りに彼に会ふた。夕食を共にして帰つた。松沢義雄、代田忠助等も同窓として出て来た。銀行の事や組合の事が頭裡に往来して経済難局に當つた自分の身の上をも考へた。併し此難局に當るのか一番愉快であつた。従つて勇氣も出た。

「栄へ行く道」を読んだ。

【語句の説明】 ①宮井隆治：宮井隆次か。一九〇四年飯田中学校卒業（州平と同期）後、大連に渡り近江商会、満鉄の埠頭事務所勤務した。

②「栄へ行く道」：一九三二年七月に出版された講談社創業者・野間清治の回想録のことか。

八月八日 月曜

晴。直に上飯、銀行出勤す。吉川芳太郎来行し多額納税議員の選挙等につき打合あり。銀行の将来につき貸付金の固定につき心配す。此期は貸付の二割を回収する予定なれども、僅に二割のみを以て満足せず、何とか旧態に復せしむる様なさざるべからず。貸付金の換価困難は更生の余地を少くせるとも思はる。銀行株旧株三円、新株廿五円払込五十銭を唱ふ考なれば、責任のみ徒に重くして前途遼遠とも思はる。組合と青山に話し、平田金太郎より賃挽繭三千斤申込をうく、如何にすべきやとに付相談ありたり。役員会を開きて決する事とせり。夕刻帰宅して釣に行き魚廿尾を獲たり。天下を忘れて江山水月に楽みたり。

市場鹿太郎を招きて喜字の祝を述べしむ。餅をつく。

【語句の説明】平田金太郎：飯田町本町二丁目の繭糸屑物商。

八月九日 火曜

晴曇小雨。組合に急使、役員会を開く。平田より申込の賃挽の件なり。午前七時支所に於て行ふ。結果惣代の協議会を開きて之に意見を問ひたる上賛否を決することとし、兼てヌキ売防止をなす。各理事及惣代の注意を喚起せり。正午銀行出勤す。警察次席小松五乙松本次席栄転の由新聞に出てたれば、其の挨拶と祝ひを兼ね署長に会い小松氏にも会いて申達す。聯合事務所で作興会より教化団体聯合会出席旅費十五円請取る。

予の名を以て伝馬町区長杉山為次郎宛左の葉書を出す。

「*倭志雄倉庫は予の所有となりたれば御預の伝馬町の所有の道具は他に持ち出され度し」と父より話ありたり。

【語句の説明】①小松五乙：長野県警察部所屬の警察官。中野警察署

勤務・衛生課勤務などを経て飯田警察署勤務。飯田在任中に警部補から警部・飯田警察署次席に昇進。一九三二年八月八日付で松本警察署次席に転任した。のちに屋代警察署長、岡谷警察署長、衛生主事（一九四一年二月就任）を歴任した。

②杉山為次郎：飯田町伝馬一丁目在住の洋品商・貴金屬商。伝馬町区長は一九一八年に設置されていた。

八月十日 水曜

晴。午前七時日本青年館に着せは、同車せし藤森馨も居合せ同一場所へ来れる事に付き驚く。午前八時より開会、斎藤主〔首〕相の教育勅語朗読より初〔始〕まり其挨拶、文部、宮内、内務各大臣より挨拶あり。式後聯合会より提出の「非常時教化対策」の研究ありたり。長野県よりは六七名の出席者あり、教化団体聯合会の政府が注意せるものなれとも其の分子に種々のものを含み議論倒れとなるものなり。但し自力更生を強張〔調〕せる点に於ては僅に教化者として心あるはうれしく思ふ。日本更生の意気も表れてよろし。陸軍大臣荒木陸相の演舌あり。彼が聯盟の視察団に対しても日本人の地震帯にある事を述べて日本伝統を説きたる点等につき彼の人格の現れも出て快し。満蒙問題をして徒勞に終らしむべきに非ず、国論を喚起して非常時に際し国論を統一するの要ありと思ふ。

午後四時主〔首〕相官邸にて茶の会に招待せられ、行きて御馳走になる。初て主〔首〕相官邸に入る。西洋料理二皿あり、サイダーを喫したり。

予記 主〔首〕相の演舌あり、憂国の情あふる、も之を述ふるに由な

かりし。

【語句の説明】①日本青年館：一九二一年に全国の青年団の寄付によって、財団法人日本青年館が設立され、二五年には明治神宮の付近に宿舍や講堂を備えた日本青年館が建設された。同施設には大本連合青年団の本部が置かれ講演会が開催されるなど、官僚主導型の青年団政策の中心地として機能した。

②教化団体聯合会：一九二八年四月に中央教化団体聯合会へと改組された内務省指導下の教化団体。連合会八回目の代表者大会が一九三二年八月一〇日から一日にかけて日本青年館で開催され、教化専門職員設置と非常時禁酒政策について議論が行われた。一〇日には斎藤実首相、鳩山一郎文相、荒木貞夫陸相が出席し、荒木が「皇軍の精神」という題目で講演を行った。

八月十一日 木曜

晴。横須賀牧内忠雄の宅へ一泊す。優遇をうけて朝八時忠雄と共に出づ。

菓子折を一つもらいて携へて上京す。横須賀横浜間の電車に投して山と海との間を隧道をくぐりては横浜に出て東京着。名川法律事務所に行きて面会を求む。事務多端の為保雄氏に面会して代田弁コ〔護〕士よりの手紙を出し斎藤孝吉事件につきて事件を大審院に呈出すべきかを問ふ。よく調べて見るとの返事あり、之を頼みて正午出づ。腹痛と下痢ありて駿台荘に入りて休憩して後松阪屋に行く。シャツ、股引等を買ひて帰宿し、夜十時半の夜行にて帰途に付く。此日午前五時半明治神宮に教化団体参詣して後、青年館に於て論議ある筈なりしも欠席せり。

此日風ありたるも暑くして東京の暑中の難凌。

太田耕造氏に電話を以て本田氏来都を頼みしか断られたり。

【語句の説明】名川法律事務所：弁護士・名川侃市が東京都に設立した法律事務所。森本が面会した「保雄氏」は、侃市の弟で後年第二代所長を務めることとなる弁護士・名川保男のことか。一九一九年明治大学卒業後判事任官。二七年に弁護士に転身した。

八月十二日 金曜

晴。朝辰野着。竹村清男と同車す。又駿台荘女中キシも来る。直に組合本所へ出勤す。中央会より会計調査の為更科学氏来組の筈なりしも急用にて帰京したれば、部会の前田来組し中央金庫より年賦借入の二万円に添付呈出すべき振興計画書を作り出す事とせり。夏爾受入期にありて両所にて千五百貫入荷ありたり。汽車中山本組合の様子を聞くに貸付金を皆十年―廿年賦貸とせる由を聞く。本所に居りて事務を見て、午後支所に来り夕刻帰宅。

野間清治の「栄ゆく道」を本支所へ一冊宛寄附し従業員をして之を読ましめたり。此書は一読に値するものなり。帰宅すれば家族皆喜んで盆の仕度をなし居るを見れば快よし。自分の仕事は皆ヤリカケにて完結したる事は一事もなし。父母に東京の状況及牧内忠雄訪問の状況に付て話せり。

小川勘三郎と本所にて話す。彼が不況の折困難する由を物語るを聞く。

組合も預金が漸減するを以て将来如何になすべきかに付て考ふれば寒心する事のみ多し。併し工夫の不足は否み難し。予記 生糸価当切八一二円を報し近來になき高値なり。

八月十三日 土曜

晴。旱拔〔魃〕雨を思ふ事久し、夏蚕受人五千貫に達す。

銀行両三日欠勤したれば出勤す。北原団藏及源左衛門来行して国光社の敷地を銀行へ明渡し度しとの希望ありたれとも、収益なき土地を流込にする事は出来ずとはね付く。放課後上柳緑を召致して千代田商会の会計に付き敏雄が家計費に費消し居る金千六百円計りに及び居る旨を告げて、之を如何にすべきかに付其決意を促し且つ其費消分を報告せり。上柳も此際社員総会を開きて其の善後策につき研究する事とせり。銀行も将来如何にすべきかに付脳裡を往来し復活に付意を砕くと雖も二三の対策にして良策もなし。自力更生か他力更生かに付研究せるも自力を以てするより外なく、此際他と合併するより外方法なきを如何にせん。

然し乍ら合併すべき好条件もなく毎日の仕事をなし自力更生の外なき決〔結〕論に達せり。奥村清顕来行し辞意を洩せり。

組合の事、銀行の事に意を砕けれども良案なし。

八月十四日 日曜

晴。盆の十四日にて父と子供と連れ立ちて墓参し祖先の霊に詣で住江、堯甫兩人の霊を弔ふ。兩人永久に冷く地下に眠を思ひ新愁を思ふ。組合支所にて夏蚕受人状況を見る。塩沢新九郎氏宅を訪問し秋蚕種ウメ付状態を視察し、小学校に於て野球の稽古中なる組合事務員に水瓜を三ケにて金一円贈りたり。本所に行き夏繭受人状況を見る。入繭少し。鼎組合にてはヌキ売防止の為新聞に八百五十円を売りたる旨出す。組合より田中句一郎宅を訪問し秋蚕ウメ付状況を視察するに九分通り終了したり。午後五時帰宅して森本晴男宅を訪問して新盆見舞せり。

母及信也の兩人、村田屋新盆見舞の為上飯し夜に入りて帰宅せり。組合の事及銀行の事、兩者共に頭痛の種のみなり。寸暇なくして思考浮はす。一つ銀行を辞して組合の為に献身的努力せんかも考へたり。青山専務の態度は組合長をネラへり。

【語句の説明】鼎組合：鼎村では一九一五年に鼎生糸販売組合が創設されていた。

八月十五日 月曜

晴。組合支所へ夏繭受人状況を見るべく行く。従業員等野球を試合すべく意気盛に出かけたり。併して上飯、銀行に出勤す。銀行にて小林岩重に贈るべき退職賜金千四百円を盆を機として贈る事とし、予は上柳喜右衛門を訪問して其旨を話し立合の上辞令と共に定期預金証を渡し、尚此預金証は上柳家へ預け置くべき旨を諭したり。盆なれば町内賑に男女の群れるを見る。電話あり青山より「秋蚕種百五×一一〇種需要に充たす為に之れが按分配布を組員に告げしが、遂に反対の申出もあればとて、急遽役員会を本所に開く事とし本所に行く。併し統一社をして一一〇×一一〇五需要家に了解を求むる運動を試むる事として役員会を終る。

左程にもなき役員会なり。

予記 国維会より地方教育改善案を徴せらる。之に対し小学校は国庫負担、東洋的教育、中学以上は私塾とす。一、〔以下記述なし〕

【語句の説明】国維会：一九三一年一月、国家機関の枢要な地位をおさえて国家改造を推進することを目的として、後藤文夫・吉田茂などの内務官僚、近衛文磨ら貴族院議員によって創設された。新官僚の団体として、岡田内閣の成立にも影響を与えた。教化団体として

の性格も有しており、日本青年団聯合会の思想的役割を同会が担うことを期待されていた。三四年一二月解散。

八月十六日 火曜

曇小雨。雨降り充分ならずと雖も干拔（魃）なれは心地よし。

直に上飯、銀行出勤す。正午頃に至れば睡氣襲来して堪へ難く一時午睡せり。千代田商會に付社員臨時總會を来る十八日開催すべく上柳敏雄に話し父に話すべく告げたり。組合の野球あり、事務員出張せり。組合問題に付ては日夜脳裡を往来し、如何にして組合の更生と農民の負債整理すべきかに付常に苦慮する所なり。午後五時帰宅して憂慮を晴らすべく釣に行く。甘尾を獲たり。金田岩男より一夕懇談したしと申込ありたり。

竹村要人山林組合の預金に付悪辣の振舞あり。金五十円金田より奪取せりと云ふ。

盆十六日なれは子女の町へ出るもの多く町内賑ふ。

野原養子離縁問題を聞く。黙視するもよろしからずと思ふ。

八月十七日 水曜

晴。組合支所へ出張して専務及江塚と共に左記諸件に付協議す。一、減債貯金に関する件、二、直送出荷問題を鼎、上飯田等へ通知の事、三、生糸色違多き事、四、仮払金に関する件。四に付ては井深竹松を呼びよせて其交渉を依頼せり。正午上飯、銀行出勤す。

財界の不況身に沁み各財界の問題に直面して不愉快の事のみ多し。厚平来訪して帰る。竹の来訪中なりしも帰る。

社会の今日 満蒙の生命線の問題は忘れられ救国の声のみ多し。

八月十八日 木曜

晴曇。組合支所に出張し青山と減債貯金に付て組合員に理事総掛りにて戸別訪問する旨を告げて其の通牒を發する事とせり。依て上飯し銀行にて更生案に付頭取と話し合せて其案に付て進まんとせり。和泉正実来行し直輸出の（直送）の利益を説く。併して直送を促す。依て何とかして直送を試み他の組合も引込みて之を行はんとす。

放課後合名会社千代田商會の臨時總會を開き全部出席して千代田商會に付て議す。議題は此代理業は西上柳家の為に起したるものなれとも現今の状況にては却て禍となり居れるもの、如し。又社長も大平氏辞任後欠員となり居れり。依て此両問題を如何にすべきかと予は提案せり。

黙して誰も言はず、肚には解散せんとする意ありしも——西上柳としては生活問題なれば是非持続したしと主張す。依て左の条件を付して之を存続する事とせり。則ち銀行にて事務を取扱ふ事、利益あれば西上柳に納付する事、社長は本家上柳之に当る事、監督は毎月総社員之に当る事。

予記 組合と銀行天秤にかけ居りしも之を決する日近けり。

八月十九日 金曜

晴。銀行の根本問題更正案を作るべく朝直に銀行に出勤すれば、大衆新聞に松尾組合の動揺と題して種々の問題一も解決せられたるものなく、組合長不信任の声もある旨掲載せられたりと聞き、取り出して見るに、果して悪口出て居りたれば之を青山に話したるに、目下出処を探索中なりと云ふ。併し大衆新聞は由来共産党の新聞にて立憲政治、君主政治を呪ふものなれば、予は絶対に反対せるに對し、個人的の憤

を組合を通してなすものなり。故に彼等か何と書かうと少しも意に介せず猛進すべきものなりと決心せり。銀行にて予の更生案を頭取及両支配人の前に披歴せしも時期尚早を以て終り、人事問題を考究して終了す。西上柳に書面を以て伊那銀行株式二十を売る件（廿八円）を問合せしに一任する旨返事あり（電話）。小林喜刀剣を銀行へ持参せしも不買。信也夕刻上京遊学の途に付く。卒業論文を書くこと云ふ。

発信 安井清。直送に付。

社会の今日 非常時臨時議会に対する政友の不満あり。

【語句の説明】①大衆新聞：『信濃大衆新聞』のこと。この時期には

統一無産政党である社会大衆党に近い政治的立場をとる。

②非常時臨時議会に対する政友の不満：臨時議会に提出される予定の時局対策案について政友会から不満が続出していた。二三日から開催された臨時議会では、脱党が続いた民政党や党内対立のくすぶる政友会において、議会への対応を巡り異論が相次ぎ、政府が対応に追われることとなった。

八月二十日 土曜

曇。組合支所に行きて本所より午前九時—十時の間に専務に会い度しとの事にて、予も之に面接せんとして本所行。途中役場に立寄りて村長を訪ねしも不在に付組合本所に行。丸山、林兩人来訪し面会するに、毛賀にては昨夜誰云ふとなく組合の状況に付研究会を開き其の際質問事項十数を挙げて、之を専務、田中両氏に質すと申居りたる由を予め木下房吉よりき、たり。両氏来り面会するに田中、青山の両理事の来区を頼むとの事なりしも、予も喜んで出張するからと申送りたり。之を察するに統一社との蚕種問題に付此兩人に責任あるものと思ひ両

者を召致して、ハキカラを集めたる件等につき説明を乞ふつもりらし。依て予も出席する事として午後上飯、銀行へ出勤せり。

【語句の説明】①木下房吉：伊那社製糸部事務部長、主任書記、信用整理などを務めた。

②ハキカラ：掃殻のことか。蚕児を掃立した台紙のことを指す。

八月二十一日 日曜

曇。小雨。早抜（魃）にして雨を思ふ事久しく久堅にては天竜川原にて雨乞をなすを見る。

甘露の雨来り夜沛然として降り、田畑潤を生したり。秋蚕としてもよき雨なりと喜ぶ。午前八時より本所に減債貯金の打合に付て役員会を開き出席す。減債貯金は全部組合より負債のあるものは金十銭以上（百元に付一ヶ月一円二十五銭位）蓄積する事。月何回にてもよろし。

併して自力更生によりて負債を支払ふより外なしと決したり。午後一時よりは毛賀集会所へ召致せられし専務及田中と共に出張す。前日毛賀区より丸山驥三と林賀一の両名来り、懇談会に出席せられ度しと申込あり。専務と田中を指名し来りしか予も出席したり。殆んど全部の組合員集合し居り、丸山正寿座長になり質問要綱を決定して置き順次質問せり。予は組合の大体方針に付信用購買販売生産等につき大体方針を話し貸付金は預金の1/3とする事、負債整理は減債貯金による事等を詳細に話して後質問に入り、専務と田中も亦蚕品種問題に付質問をうけ最もハキカラ集め問題は憂慮せられたるものなれども個人で集めたと田中釈明せり。併して田中は帰り次に青山帰り、最後に予は居残りて午後九時迄話して毛賀の人々も気分よく解散せり。予記 予の大体方針の要旨。

一、農村不況打解〔開〕は自力更生、即ち各自の努力。

1、更生の途、生産能力の増進即ち高く売る。金をとる。

2、負債整理。減債貯金。村内農家一戸の収入と支出平衡を得ざる事。信用、販売購買利用事業に付て信用事業低金利で貸せる。販売高く売る。

八月二十二日 月曜

曇小雨。組合の減債貯金を以て、農村負債整理を行はんとして其の趣旨の徹底と奔出の爲め代田耕地に出張し斎藤定四郎と共に戸別訪問をなす。先づ佐々木与平より初〔始〕めたり。「既に減債貯金の件は回文を以て御通知申上置きたれば既に御承知の事ならんも此不況の際十年計画を以て少額宛貯金により漸次支払つてもらふより外に案なし。故に百円の負債に付月掛一円二十五銭位の貯金を以て十ヶ年間積貯すればは元利共に完済出来るべし。故に此際蓄積を望む」と告げたるに皆賛意を表し、最少額三十銭位宛貯金出来たり。午前中奔走して見たるに成績案外よく三角屋にて斎藤と分かれて八幡支店に入り昼食して午後三時銀行に出勤せり。近來組合長と専務と主客転倒の憾あり。専務をして専務たらしめざるべからず。

発信 ○原農夫。

受信 忠雄。

【語句の説明】①斎藤定四郎：代田の耕地委員（一九二六～三二年）、

松川入山林組合会議員（一九三二～四〇年）を務めた。

②原農夫：飯田病院第二代院長（一九三二～五六年）。

八月二十三日 火曜

晴。伊那町に於て貴族院議員補欠選挙あり。父も有権者として是非投票に出席する事となり自動車をも以て伊那町行、吉川と同行す。予は付添として同行し午前九時出門午前十一時投票を終り福住に引上げて休憩し昼食を喫す。代田千章と会す。昼食後帰途に付午後三時予は銀行に返り、父は自宅に返る。貴族院選挙は林七六と宮坂作衛と競争の形なりしも両者共政友系なればとて県下代議士之れか仲介となりて両者を妥協せしめ補欠選挙には林、次半期は宮坂、後半期は林と云ふ事にせり。併も僅十七日の補欠選挙なれば之を争ふものなきも次期には必ず争ふものを生ずべし。誠に生気なき選挙なり。昼食の食物鰻と麦酒に当てられて下痢を起したり。夜分丸山幸治来訪し銀行よりの借金取立に付て弁護士にかけられては困ると申込来り、十月には全部支払ふからマケてもらい度と頼まれたり。仍て金利を支払ふべしと告げたり。次に西上柳千代田商会に付き金田と打合せ収金人として敏雄を使用する事の話と中山をして千代田生命に当らしむる事とせり。

社会の今日 第二次臨時議會開かる。民政与党、政友態度不定。

【語句の説明】貴族院選挙：府県ごとに選出されていた貴族院多額納税者議員の補欠選挙。本選挙で当選した林七六は九月一〇日の多額納税者議員総改選まで僅か半月余りの短い任期を務め、総改選では代わつて宮坂が選出された。これは任期七年の前半を宮坂、後半を林が務めるという「妥協」に基づく結果であったが、実際には宮坂は在任中の一九三三年に死去。翌三四年二月に実施された補欠選挙では上伊那郡出身の製糸家・武井寛太郎が当選し、林は次点で落選した。

八月二十四日 水曜

晴。毛賀石打場地方減債貯金募集しつゝ廻れり。併も房吉を伴ひて廻り見るに疲弊甚しく活力に乏し。巡回して減債貯金の利を説くも理屈を言ふものあり。小木曾勝次郎の如きは蚕種代を二度支払ふ事となれば供繭は考へ物た等言ふ口吻を洩せり。巡回して其利害を説けば皆賛成して之によりて負債を整理せされは他に良法なしと多くは賛意を表し、窮乏せる財布より二十錢三十錢を出してくれるを見ては哀れもあり嬉しくもある。午後上飯して銀行へ出づ。併も銀行には之れと対照して何の霑もなし。冷えたるコンクリート建の内にては金と力あるのみなり。

八月二十五日 木曜

晴。減債貯金の募集にて赤羽を連れて耕地内を巡視し減債貯金の利益を説き産業の増殖と負債の整理に付き勸説して巡視す。先づ森本吉郎平より始めて其勸説之つとめし故に相当多額の貯金出来耕地の2/3を終了す。此日銀行は欠勤せり。何となくノンビリしたる日なりし。

勧誘して巡視すればグズ／＼して居る*＊茂一の如きあり、負債多くして意気銷沈せるを以て激励して此際整理すべきは整理し更生して進むより外致方なし。或は一ヶ月の内二十五日は自分の仕事をなし五日間は他より賃銀をとりて之を以て減債貯金に充てんとする等計画を立てしと勧めたり。又或る処にては養蚕等の不確定収入を以て予定計画とせずして野菜を以て之に充つるとか又は他に産業を起して之によりて減債貯金を励行し十ヶ年計画を以て此負債を皆済する事とすべし、若し之れが出来なければ最後は悲惨なる状態に陥るべしと予告し

て勤儉力行をすゝめつゝ、巡視すれば喜んで貯金を得。

午後六時迄巡視し募集せり。

予記 父野原を訪問して養子離縁問題に付父の意見を吐露し参考として来る。

八月二十六日 金曜

晴雷雨。新井耕地内を組合減債貯金の集金をなして回る。中島忠助より始めて焼酎屋、山下方面を一週(周)せり。之によりて新井は金百円計りの減債貯金を得たり。午後零時にて終了し、松島藤太郎方を訪問して補助として金五十錢を与へ之に五錢補足して五十五錢の貯金をなさしむ。予の減債貯金集収の方法次の通り。減債貯金の効能。何時にても元金へ小額にても支払得る事。負債整理の一家内中の意気を激励し産業に熱心になり得る事。経営に予定を立て、進み得る事。此際自力更生によつて国民振起せは六十億の負債何ぞ恐るゝに足らんと、一つは百姓を激励し一つは負債整理の要を説きて勸説につとめたり。之によつて各耕地内の家庭の状況を視察するを得たる事、の利あり。一般に新井耕地には特種飼育するもの少なく(秋蚕)単にアンドン飼丸山道之助箱飼今村松之助あるのみ。一般に茶を呑み菓子食して悠然として暮らすもの、如し。故に産を興すもの少く、武陵桃源なり。午後一時銀行へ出勤して事務を見る。大宮祭にて煙火沢山出づ。不景氣にても煙火は出づ。雨にて見物少し。

予記 糸価暴騰し千円相場を現す。

【語句の説明】①アンドン飼：行燈飼。行燈育ともいう。稚蚕の時期に行燈状の容器の中に蚕棚を作り飼育し、壮蚕の時期に通常の蚕室に移動させて飼育する方法。

②箱飼：稚蚕をボール紙、木、トタンなどで作られた箱に入れて飼育する方法。

③大宮祭：大宮諏訪神社で行われる秋の花火祭り。例年八月二六日の大宮諏訪神社にはじまり、九月一〇日に愛宕神社、九月一四日に今宮郊戸八幡宮、九月一七日に長姫神社と、秋の祭典が順次開催される。

八月二十七日 土曜

晴夕立。組合に於て近隣製糸業者の部落会あり、会するもの千代を除く全部即ち龍丘、川路、龍江組合、市瀬、松尾両営業製糸、三穂、集まり工賃引上問題に付て協議す。偶ま松尾組合は此部落会には後入りて予が地元として座長となりて会議を進めたり。信濃時事新聞より外務員及大原桑村来組し産業組合欄を設けるからとて資金募集に来る。之に対して金二十円を渡す。又組合の負債整理自力更生に付て話す。遂に銀行を欠勤する事となる。丸山幸治来組し組合の百十七銀行預金を以て貸付に振替てもらい度由話あり。貸金の内金七百元を貸して七百元は現金を以て償還すべしと申送り。今村与一郎来訪してマセ口の入口の土地坪金四円にて売れと云ふて其代金七十円計り持参せしも坪金五円にて十九坪九十五円てなければ不応旨答へて返し尚父より種々注意を受けて去る。予は半年貢出せと主張せり。東口入口は坪六円にて買ひたるなり。故に此際坪五円はマセ口なればマケてやりたるなりと云へり。予の交渉には駄弁多過る。氣を付くべし。

予記 九九九円相場現れたり。地目変換の摘発あり之に付き研究せり。社会の今日 時局匡救の議會開かれ外相の演舌満蒙問題に付てあり。

【語句の説明】 外相の演舌：内田康哉外務大臣は八月二五日の衆議院

本會議で演説し、政府は満洲国を正式に承認するため準備中であるなどと表明した。

八月二十八日 日曜

晴。午前中悠々自適せり。庭を掃除し新聞を耽読せり。午後より組合支所に出張す。上飯田、鼎、下久堅等を召致して生糸直送に付て協議せり。上飯田不参、依て右三者協議するに今後は直送か糸聯出荷の二つに分野定まるものとして、伊那社は糸聯出荷となり不出荷組は直送となるべしと思はれたり。和泉来組し此の相談に参加す。併して是非荷扱人として尽力したければ頼むと申込ありたり。鼎は日本生糸出荷の為直に如何ともし難く下久堅は九月下旬より松尾と行を共にする様に話出来たり。夕刻帰宅後小学校に於て青年処女会主催にて久保田主事を召致して産業組合に付て講演を頼み出講すければ組合長の参加を臨〔望〕む旨通知ありたれば出席して久保田の講演を聴く。組合の社界〔会〕的任務―社会改造―松尾組合の工場統一の要を説きたるはよろし。予は青年に対して其機関雑誌第一号の「八幡山より見下せば」の記事を指し「ツマラン事を書いたナと縦したり」。之には青年稍恐れをなす様見受く。

予記 南信新聞重役会あり欠席。弁天松森の道路工事設計を変更したりとて研究して之を設計通り工作せしむる事とせり。社会の今日 議會政治の倦怠振を發揮す。

【語句の説明】 青年処女会：青年会は一八九八年に創立され、松尾学校の同窓会などを併せて形成された。一九三二年七月に社会主義的傾向の強い下伊那郡青年会を脱退していた。処女会は一九二五年に松尾村女子会より独立して創設され、講演会の開催もその活動の一

つとしていた。

八月二十九日 月曜

晴。残暑甚し。生糸価千円を突破し破竹の勢を以て昇る。

丸山、今村両耕地総代を召致して弁天松森の処の道路設計と異リセメン〔ト〕壁を以て構作すべき処土巴〔坡〕を以てす。故に之れは設計と異なるものであると叱し之構成を設計通りにせよと迫る。父は癩に障るからとて面会せず。予のみ面接して交渉したるに彼等は木下作太郎を召致して其説明をなさしめ然る上にて何とかすべしと答へて去る。又マセ口の入口の土地代は秋蚕上り迄待ちくれと云ふ。併し土地代金の如きは其時の相場あり、繭の二円の時五円ならば繭の五円の時二倍半になるべしと告げて早く勘定すべしと告げたり。然る後上飯出行す。青山へ電話を以て三井物産直送を告げたり。猶銀行へ中沢村北原義茂来り。彼か俳句をやると芳名録を示せし故之に署名して与ふ。釣に行き松川にて十五六を獲たり。

予記 北原義茂の俳句へ賛成の署名し尚返状に青山白雲の四字を書し与へたり。

発信 関孔太郎。山津波見舞。小池寛。

社会の今日 議会率勢米価問題で政府と政友とモム。

【語句の説明】①土巴〔坡〕…土の堤のこと。

②北原義茂…司法代書人（後の司法書士）。一八八八年、上伊那郡中沢村生まれ。俳句を嗜み、雅号は岳東庵富嶺。中沢村に居住。一九三〇年に中沢村経済更生計画委員。三二年に日本司法書士全国大会に出席するなど司法代書人の地位向上に努めた。戦後は中沢村会議員などを務めた。

③率勢米価問題…開会中の第六三臨時議会では、農業恐慌下の米価下落対策が焦点になっていた。率勢米価とは、米価指数の物価指数に對する割合の趨勢により算出された米価のこと。一九三一年の米穀法改正以降、米価下落時に政府が米穀の買い上げを発動するための基準として支配的だったのは率勢米価の下値二割であつた。斎藤実内閣がこの規定を維持しようとしたのに対し、政友会は率勢米価下値二割まで米価が下落しない限り買い上げを発動できないのでは農村の窮状を救うことは到底できないとし、同規定の削除を求めていた。結局政友会案が衆議院を通過するも、貴族院で率勢米価規定を削除はしないが当面は米穀生産費を米穀法発動の基準とするという折衷案が可決され、両院協議会で貴族院案が承認された。

八月三十日 火曜

晴。組合支所行。製糸部の操糸状況を見るに能率点数共に不良に付、現業長を呼び出して専務に命じて之を矯正せしむべく、午後六時より支所に於て現業長会を開く事に決したり。尚青山と種々銀行の問題に付話を聞くに種々世評ある由を聞く。曰く、重役として財産あるものは吉川氏のみ、山本地方百十七銀行の流込土地多し、結極〔局〕の処は百十七Bも減資なるべし等の噂を聞く。それより正午上飯して銀行出勤して頭取と話合ひたり。丸山幸治来行し彼か父の鶴弥の時より借入た貸付金を係より弁護士ハカキを付けて催促したるに彼は其の所在の智脳を張りて功〔巧〕みに預金を買入れ来り。銀行と予と彼との間を折衝し来り種々変して之を解決せんとし予は又心安さによりて彼に有利に解決してやらんと計りて其間の交渉進まず。放課後山本へ行く。予定ありしも今村与一郎道路の事にて木下作太郎連れて来るので

(電話にて) 之を承諾し且又組合支所に現業員会開かれたれば出席して一場の訓示をなす。山本行を中止して帰宅す。

予記 清水謹一が書画骨董の会を初めると云ふので其賛成人として署名せり。

八月三十一日 水曜

晴夜雨。組合へ出勤せずして今村与一郎が木下作太郎を伴ひて松森道路に付来訪する筈にて待ち居りしも来らず。遂に道路壁を構築するより外なしと譲歩の余地なきを確めたり。併して中島に立寄りて其話をなし上飯、銀行に出勤す。今村与一郎、丸山泰治、木下作太郎等来行して松森道路の構築に付道路費用なければ設計には壁とありしを土巴〔坡〕に変更したる旨の陳述ありしも、如何に弁明するも譲歩の余地なければ君等も村長に会いて其旨を陳述し予も亦村長に会いて設計通り構築すべき旨を告げる事として分れたり。千章来行し約して天龍峡ホテルに山本父を訪ふ事とし放課後ホテルに行く。山本父は山本の家政上ホテル番人として行く事としたるに對しては異議もありたれども父の発意なれば止むを得ず。田中兄弟居合せて話し夕食して帰る。社会の今日 政府と政友会と率勢米価にて論争せしも妥協出来るらし。

九月一日 木曜

雨晴。無風。氣つかはれた二百十日夜来の雨晴れ、秋の晴れとなる。父と相談し役場へ行く事とし、本塩助役に面会して農村及小商工業資金借入に関する相談をなし、農山漁村資金の内八掛を借替の為に今回の農村及小商工業資金を借入る事とせり。申請書を本塩と相談して作り役場へ出す事とせり。青山に右申請書呈出事務をなさしむ。尚本塩助

役に對し村長不在なれば左記の件を話す。「弁天松森の道路構作、以前の設計に反し土巴〔坡〕を以てせり。此の如きは元の契約に反す。故にコンクリ壁を以てする事に構築〔築〕せらるべし。之の趣を村長に通せよ」。田中土地係に税務署よりの土地目返換手続に付話したり。正午出飯、銀行出勤す。放課後予て話合せたる金田より特に面会して密議したしとの事に付姫城館にて話す。金田曰く、組合を止めて銀行專業とせられたし。予の銀行業に適する事、組合事業の村内及耕地内に於て予の不評なる事等を並へて、大平久男の轍をふまざる中に手を引くべし、と告げたり。時機を見て善処すべきを答へて置けり。此会合は予の一身上の重大問題のみを取扱へる特筆大書すべき会見にて予の一生の重大事なり。

予記 江塚佐三郎も予の組合長として不適任を唱へたる由聞く。

【語句の説明】 大平久男：下伊那郡千代村出身。千代村村会議員（一九一七―二五年）や学務委員を歴任し、三二年當時は同村野池区長を務めていた。

九月二日 金曜

晴。残暑甚し。組合へ行く。昨日の金田よりの話と自己の身上の事を考ふれば果して予は銀行の家令になつて世を離れて仕事をした方がよい。余り世間的な俗物でもなく又交際等も上手ではない。果して然らば銀行の中に居て唯銀行を大事に仕事をして行けはよい。然し之れは銀行と云ふ様な好ましくない仕事に一生を打ち込むのは自分の一生を不快裡に過す事となる。自己の性格から云へば銀行が適し望みより云へば銀行はよくない。此の二点を考へた。支所と本所へ行つて農村及小商工業資金を借入して農山漁村抵〔低〕資を返却する案を立て、

部会へも問合せて役場を経て右資金借入度旨申込みたり。又東京行の話もある。銀行へは松沢八二支店長来訪し南信倉庫を県の指定倉庫とする件につき話あり。希望を述べたり。午後六時帰宅。左股神経痛にて痛む。

言多ければ品少し。言を発すれば確信のある言を発すへし、とつく／＼銘じたり。

社会の今日 議会三日迄一日間再延期。

【語句の説明】①松沢八二支店長：松沢鷹三。当時八十二銀行取締役のほか、松本支店長・本町支店長・東町支店長を兼任していた。

②南信倉庫：飯田知久町所在の倉庫業者・乾蘭業者。この当時長野県では日本勧業銀行から百五十万円の融資を受け、八十二銀行取り扱いで県下の営業製糸へ購蘭資金として貸し出す施策を進めており、九月七日には県下指定倉庫業者を県庁に招集して資金貸し出し・蘭荷取り扱いについての協議を行っている。

九月三日 土曜

晴。上飯、銀行へ出勤す。国民精神作興会の方も九月一日より強張週間なれば何とか計画を樹立せざるべからず。併も如何にして国民精神を作興せしむべきかに付ては従来久敷研究すと雖も名案なし。只予の持論は国民精神の廃頹の如きは末世期的現象なれば之を作興せしむるには非常手段を以てするより外なし。其の非常手段とは「戦」あるのみ。国民の輿論を満蒙に集中する事以外に途なし、米国に向はしむるより外なし。対外関係を以て之を医するより外平常の手段にては良方なきを如何せん。

銀行に午後五時迄居て帰宅す。伝馬町杉山為次郎来行して三原屋土

蔵に伝馬町一丁目の屋台等入庫に対する使用料徴収に関して取壊す迄にても借り度しと申込あり。使用料を決定してくれなければ只にては困ると申込置けり。父に其報告せり。

秋蚕一般に今の処好経過の由、桑一貫目三十銭と云ふ。

水野治より「長崎上等兵」贈り来る。

発信 虎四郎。

九月四日 日曜

午前中飯野又一を呼びに使者をやりしも来らず大に父忿怒せり。之れは彼か鳥部屋を無断にて建てたるにより之を宅地として税務署が採用するや否やに付て打合を要するか為なり。

組合支所より本所行。事務を打合して午後六時帰りて横浜行の仕度して午後八時半発にて出浜の途に上る。青山と江塚と同行せしむ。車中北原博人居合せたり。旅客コミ合ひ横たはる能はず睡眠出来ずして東京に廻り横浜行。

九月五日 月曜

晴。東京を経て横浜行。汽車中旅客多く殆んど不眠。

横浜に付〔着〕きてカトヤ旅館に入れば鼎牧野、太平、木下等居合せ種々糸聯の取引模様につて談〔語〕る。正午頃下久堅組合を同伴して三井物産に吉田初治郎を訪問し、長島氏立会の下に細部協定をなし、手数料の無なる事、数日間の荷物の無保管料等に付き打合せて後グラインドホテ〔ル〕にて昼食を供せられて、糸聯に立寄り飯島直氏に面会し定価の売るや否やに付ては一応荷主に注意して貰ひ度旨申込みてイヤ味を云ひたり。それから帰宿して奥村の秀島、和泉来りて会食して

寝に付く。

【語句の説明】吉田初治郎：吉田初次郎。一八八六年愛知県生まれ。

一九〇七年東京高等商業学校を卒業し三井物産に入社。一九三四年時点で横浜支店長。三井物産ではこの他にニューヨーク支店長や生糸部長代理を務めた。後に東洋レーヨン取締役、東洋綿花取締役、大東紡織社長を歴任した。

九月六日 火曜

小雨。横浜カトヤ旅館に青山、江塚、下久堅組合の桐生、羽生の兩人と泊る。朝雨降り出てたれは奥村、神栄両店へも行かずして直に奥村の召〔紹〕介にて松田の牧野製糸を訪問して煮繭機奥村式を見学し兼て織田式機械操糸、二部制を見る。共に勝れたる方法なり。午前中奥村番頭竹川数男来宿して器械に付て説明あり。其の原理をよく研究するを得たり。牧野工場を見て小田原急行に乗して新宿着京後夕食して、江塚、青山等と分れて各自宿所に返〔帰〕る。此日生糸相場安し。

【語句の説明】①松田の牧野製糸：神奈川県足柄上郡金田村（現・大井町。松田町に隣接）にあった牧野製糸場のこと。一八八二年、牧野仁三郎が創始。最盛期には一六〇釜、従業員二五〇人に達した。一九四二年農林省の指示により陸軍被服廠の下請け衣料製造工場となり、牧野繊維と改称。

②煮繭機奥村式：横浜と神戸に拠点を持つ輸出生糸問屋奥村商店の代表、奥村鹿太郎による進行式煮繭機の蒸熱室は、一九三三年五月に実用新案として認められている。進行式煮繭機は、多条繰糸に適する蒸気浸透煮繭を行うもので、一九二七年に千葉式煮繭機として確立した。

③織田式機械操糸：昭和初年に中原工作所が開発した多条繰糸機。糸の切断を防止するため、過剰な張力がかかると小枠が停止する機構が取り入れられ、戦後も普及した。

九月七日 水曜

雨曇。朝九時駿台荘を出て、自動車にて青山金三郎を誘ひて中央金庫に行く。更科学出て来りて応接す。事業低利資金二万円申込のものと養蚕資金との間に帳尻の相異ありたるを以て之を正さんとして其話をしたるに、前者は投資の途なきにより養蚕資金中に支払ふ事とせり。猶生糸出荷先に付ては資金の關係上余り統系機関利用を強張〔調〕せざる様話したり。よく中金の機能等につき充分了解を得て退出せり。

丸ビルに於て青山と骨董品の売立を見て分れ、予は名川弁護士事務所を訪問して下島宇之次郎、中村信八事件を問合せ、保男、中込に面会して後松阪屋に去り買物して夕刻帰宿。近藤政寛氏に面会して夜行十時廿五分にて駿台荘を出づ。入札品左の通り。唐物器局一ツ、染付水指1.0、茶の湯釜3.00、大鼓形水滴2.00の四点なりしか落札や否や不明。駿台荘に頼み置きり。

【語句の説明】近藤政寛：一八七四～一九五三年。伊那郡山本村生うまれ。松本中学から東京農林学校を経て國學院で国学の研究を行い、一八九四年に帰郷。飯田白山神社をはじめ、近郷の神社で神官を務めた。

九月八日 木曜

晴。汽車でロク／＼眠られずに辰野に付〔着〕て、諏訪の海は静に湖畔の製糸場系況の好況に雲烟出て居るを見る。原安雄と電車中刀剣

の話や副蚕糸の話等して着飯せり。銀行に出勤す。兩三日欠勤したる銀行の様子別に変化はなし。只山氣身にしみ清涼の秋氣立ち飯田の町にも氣清き秋清の爽味あり。銀行にて終日働きて後帰宅せり。父に土産の佃煮及和氣子の洋服等を出して皆喜び合ひたり。近藤代書人に電話にて一先つ勘定して貰ひ度旨申込みたり。組合へも電話をかけたるに明日聯合事務所に於て郡部会あり。出席する事とせり。上京中の疲労一時に発し睡氣と惰氣と出てたり。帰宅後入浴して東京にて信也に会いたる談等して眠る。銀行にて桑原鉄象来行したれば安松翁の短冊を十二枚頼みたり。

九月九日 金曜

雨。聯合事務所て組合長会議あり出席す。会議には県より役人二人来り、北沢主事来りたれば吉川芳太郎を監事として廿二年勤めたれば其功績に対して表彰せられんことを懇望せり。会議中無言なりしも平野氏に負債整理法の運用如何を問ふ。運用少なきものなるべしとの返事あり。北原阿智之助に作興会として教化団体聯合会に出席したる件報告して、国としては連続的に国民精神の作興と自力更生に付て全国民に呼びかくべき事を話し、作興会として何れ方法を講ずる事を打合せたり。組合長会議に於ては岡村勝太郎例の駄弁を弄したり。県の北沢か予算を立てるを言ふた事に対して注意せし如きは面白し。会議了りて銀行へ行きたるも既に終る。

【語句の説明】北沢主事：長野県知事官房統計主事補・北沢安生。

九月十日 土曜

雨晴。雨より天氣になる。組合へ行く。支所より本所に行く。本所

にては中央金庫との勘定尻合はず徒に信聯をいどみ、青山は常々松沢か不良をなし居るもの、如しと察したれば之を正すべく信聯へ行く。午前中組合本所に居りて午後一時銀行に出勤す。役場を訪い助役に弁天松森道路に付抗議を申込み、又田中に会いて地目修正に付き依頼せり。本塩助役より銀行にて山林組合の預金払戻に付て要求あり。竹村の醜運動ありたるも之を黙す。上飯後信聯を訪問せり。松沢に面会し中央金庫と組合と信聯三者の關係を明にすべき計算書をとりにて取調方を申込みたり。吉川村長に電話にて松森道路を設計通り改修せられたしと申込みたる処、工区にてなしたる事なれば工区へ聴けと云ふ。村長が責任者なれば村長に於て取計はれたしと問答したるも、決〔結〕局如何とも致し難しと村長の言明ありたればスゲなく電話を切る。放課後近藤代書人を訪問して保存登記及其他登記事務打合をなし手数料を支払ひたり。又屋賃を当分の間一ヶ月十円と定むる旨通達す。予記 貴族院議員選挙あり。林候補遂に折れて駄目なり。宮阪二三回来訪せり。父病を押して出かけ伊那町にて投票せり。宮阪当選。林と宮阪間に変な妥協あり。

発信 鮎沢哲祥へ家賃の話に來れと出す。

九月十一日 日曜

曇雨。午前中サブリに行きしも、雨の為増水してサブリ場よろしからず、宏を伴て山に登り、菌を取る。雑菌ありてとり帰りて午前中長養せり。増恵、福住へ出産祝の為上飯して、午後六時帰宅。予は組合支所より本所に行き事務を督す。組合事務所は單に黙々として事務員にオゴリ居ればそれにて良し、仕事をするに及はず、仕事は皆他の者がやりくれるものなりと考へつ、あり。午後六時帰宅して物安居士著野

狐禪を読む。面白にして知音の嚮なり。左股の痛あり神経痛なるべし。

目醒むる時悪夢に犯さる。曰く、「組合の理事全員予に裡〔裏〕切り窃に組合大会を開き、予を引出して辞職を迫れり」。民生の為に惜む、常に産業組合の事夢にも離れず、村経済の死活は組合にあり。併して村産業は今や徐々に衰亡の域になり、養蚕業の不振と共に村は如何にすべきかに付て一考せざるべからざる時に際会せり。

発信 千章。

【語句の説明】①サブリ場：サブリ網（生糸で作られた網を二本の竿に張り、竿本を束ねて水中に投出して使用）を使う漁場のこと。

②物安居士著野狐禪：近重真澄（号は物安）著『物庵禪話』所収の「野狐禪」のこと。

九月十二日 月曜

雨。組合支所に行く。青山来り、統一社より明年春蚕種需要に充たずと申込あり。此の如き愚弄したる事は之を不問に付すべからずと江塚と共に之を議す。尚村より落木板木を一杯九、五〇錢にて買取れとの話あり。之もペテンのような話なれば、青山と江塚に一任せり。併して凍豆腐組合よりの申込借入金に対しても七万円の申込に対して如何にすべきかに付考慮せり。

午前十一時上飯、銀行出頭す。太平久治男子を挙げたりとの話あり。岡部来行す。上柳千代田商会の話を取扱になせり。

雨降り続き増水して人心寒し。

夜父と諸勘定をなす。昨日父曰く毎月三十円の納金の外に税金として汝の負担分百九円あれば出金せよと云ふ。之に対しては余は何とか救助を乞いて置けり。

九月十三日 火曜

雨。組合支所を経て上飯す。組合よりは正午に至りて事務を見て後上飯したれば、午前十一時銀行出勤す。毎日の雨にて松川等出水あり、落木四百杯流出せり。飯田にては梵鐘を打ちて鼎村辺の松川出水に備へたり。毎日雨のみなれば桑摘みにもよろしからず。一般に秋蚕良好なれども連日の雨天の為違蚕もあり。桑一時は一貫目三十錢を唱へしも、昨今は十六七錢に暴落したり。

上伊那地方より来るものと云ふ。一般養蚕食延五六日のもの多し。午後五時の自動車にて帰宅して、天竜河畔を見るに、予想よりも出水少なく、全く被害の如きはなし。

社会の今日 満洲国承認に対し政府の腰頼多し。

【語句の説明】満洲国承認：満洲事変以降、関東軍は満蒙地域での建国工作を推進し、一九三一年三月一日に清朝最後の皇帝溥儀を執政に据えて「満洲国」の建国を宣言させた。日本政府は承認を渋っていたが、斎藤実内閣は軍部の圧力や世論の突き上げにあい、同年九月十五日、日満議定書に調印し満洲国を正式に承認した。

九月十四日 水曜

雨。組合支所に行く。工場を一巡視して後上飯す。銀行重役会を開き最近の営業状況及其他に付考究し銀行の将来につき既定方針を確保しつつ、貸金の取立と預金の支払を行ひ、之によりて更生資金三十万を得て漸次更生せんとすとの将来の計画に付、説明を試み、重役の安心を得せしめたり。山口氏も東京より馳せ加りて悠々自適する由なり。今宮の煙火数百本打挙げたれども雲低くたれ込め雨も降りたれば、秋空高く花火天を幣〔蔽〕ふ様もなし。社会一般に光明なく、ノンビリ

した処もなく暗中模索して、此乱世を過すものなるか、明治の大御代の後に来るべきものは此暗黒時代なるか。人は皆生存競争に血走り、太平を楽しむ等の点は鮮しもなし。重役会終了して、午後七時帰宅。

山本より久男来り、桑を売りたいを以て、桑摘して山本へ運搬せり。一貫目三十銭にて世話せり。久男泊込み居れり。

今宮花火出てたるも、雨にて空し。

九月十五日 木曜

雨。連日の降雨鬱陶敷事限りなし。組合支所に行き、事務を見る。松野源一來り、永安貯金を引出して借金を支払ふと云ふ。之を拒む。原伊那太郎来り、定期預金証二百七十円を持参して金十円貸せと云ふ。組合では貸金は今下は中止せり。然らばとて、予は個人的の貸付金をなす。

午前十一時出勤す。頭取と交代す。長阪の貸金弁償にて、林、和地、戸田等の間に交渉あり。金十円の処にて引かゝり、遂に将来利用を条件としてマケル事とせり。宮沢彌来行して、予に面会を求めて曰く、福沢順一に四千八百円を以て、山林、田畑入担借金あり、之を是非債権の譲渡をうけて貰ひたし。予は之を断るに左の通りなす。福沢は手腕に於て当底予等の及ふ処にあらず、故に彼との取引は御免蒙ると、併し之は父に君から直接話して父の承認を経れば兎も角もなりと結へり。仍て後日来訪する筈なり。

毎日の雨にて天竜増水す。朝投網に行きたるも僅に二尾を獲たるのみなり。

予記 満洲国承認開闢以来の大業此に発生す。国民一般生活に喘き此偉業を国論一致せるを見ず。

社会の今日 父と朝茶呑話に「今時は明治の大御代の後をうけて、既に乱世に入り居るものなれば父の如きは幸に此大御代に生れ過したれば、乱を知らず」。「治に居て乱を忘れざる」心を持たなければいかん」と予は父に申す。

九月十六日 金曜

雨。不快の日のみ続く。秋空一碧天高き日なし。

銀行へ直接出勤す。併し銀行業の様ないやな仕事に何故携はりしかを今更自らを責む。特に此不況に入りて人を責むるに急にして恨を買ふ事、(二) 他人より金持の如く見らるゝ事、(三) 其実金はない事、(四) 自己の責任を負ひ私財迄も提供せざる可らざる事、(五) 業務に興味のなき事。午後六時帰宅す。

書を読まず又有意義なる事もせず。徒に道路問題、耕地内の人心の予に対して悪意を持つこと等につきて心竊に面白からず。

九月十七日 土曜

曇少雨。三霊社祭典にて朝の内日光さし添ひ晴天を思はしめしが、時々降り出す。組合支所を経て上飯、銀行出勤せしに和泉より電ありて宮嶋と共に仙安にて昼食する事となる。和泉に三井直送の件話あり、千斤に付仲介料として若干を支給するを以て、極力組合の味方となりてつとむべき旨話ありたり。放課後吉沢工、吉沢武夫、今村、山下、田中明等来行し秀雄の土地入担に付話ありたり。併して当方案を示して先方と打合したるも、先方十年賦無利子を主張して譲らず不調に終る。屋上にて花火を見る。各近隣支店行員来行せり。堂詣、ブトウ等にて酒を置きて見る。金田の宅を訪問して夕食の饗をうけたり。戸田

屋刀劍磨に小林より買取たる刀を磨にやりたり。大平と共に磨刀を見たり。此刀磨賃及新サヤにて金十円を以て作るこの事なり。

【語句の説明】三靈社：長姫神社の別称。一八八〇年創建。

九月十八日 日曜

曇少雨。曇なれとも時に少雨あり、日光見へ出す。大石やを招致して彼の小作地に建てたる鶏舎を税務署より宅地とせよと摘発あり、田中宗三を召して之を実測せしめて、宅地とするか否やを飯野に念を押す。俸の為に建てたる鶏舎なれば俸の意を聞きて返事する旨を告げて去る。田中来訪するや否やを待つ、終日来らず。宮沢弼来訪するや否やを待つ。之れは福沢順一が名義上買取り居れる弼の家屋敷を買取りくれ間敷やの話ありたるも、予としては福沢氏は手腕家にして取くみ難き旨告げたり、併し父に相談せは或は買収しくれるやも知れずと返事せり、之に対して父に話に来る筈なりし。午後三時頃組合支所行、一巡視して飯田に行く。大宰楼に於て加納金三郎同級生の歓迎会あり、其割込に出席し第八回同級生、木下、一瀬、原、本多、金田等と飲む。加納は海軍省より特務機関として満洲出張中なりしも、軍令部付となりて帰省したるものなり。

予記 満洲事変突発記念日にて国旗を出し祝す。組合製糸の汽笛を鳴らし梵鐘を鳴らす。

【語句の説明】①大宰楼：太宰楼のことか。当時飯田市上荒町（現在の中央通り付近）に所在していた飲食店。

②加納金三郎：一八九一―一九六三年。長野県飯田町生まれ。東京高等商業学校卒業後海軍に入隊、主計将校として勤務。一九三二年主計大佐。燃料廠採炭部長時代の一九三八年六月に発生した海軍炭鉱

爆発事件の責任を取り、主計少将で軍を退いた。

③満洲事変突発記念日：長野県下では上田市・松本市で市民を動員した大規模な記念市街戦が行われるなど、各地で様々な催しが開かれていた。伊那地方でも、軍事講演会、軍事活動写真会などが挙行された。

九月十九日 月曜

晴れ。秋雨晴れ日光当り、久しく秋空を見ざりしが碧天を仰くを得たり。秋の雨多くして秋蚕違蚕多く、為に県の奨励品種平和安泰の如きは評判よろしからず、新聞に悪評出づ。

午前中は組合支所及本所に費されて午後出勤せり。銀行の方かいやなれとも月給の手前止めもならず、出勤するなり。

【語句の説明】県の奨励品種平和安泰：一九三二年における長野県の蚕の新品種。下伊那郡で成績が非常に悪いという評判があったものの、実際は同郡の山吹村では好成績であり、上郷村でも同郡の養蚕家が奨励している一一〇、一〇五より良い結果であったという。

九月二十日 火曜

晴。日本銀行松本支店長始めて飯田を巡視に来ると云ふので、頭取は駅に迎へて天龍峡迄行きたり。予は朝より出勤して事務を見る。木下栄治を赤穂支店へ出張せしめ事務整理を行はしむ。宮沢支店長がガンバリ居りて事務の整理を行はざる為なり。午後一時本所に役員会を開きたれば本所へ行き、再び日銀松本支店長と共に毛賀駅より乗車し日銀支店長を迎へて当行に到り、屋上より市中の全景を見て日銀支店長は各行を巡視し仙寿楼に於て晩餐会あり、頭取と共に出席す。大に

飲みて終に第二次会に三九二へ行く奴を連れ加り、午後十一時にて帰る。功成らずして帰る。近來神經衰弱症甚し。

組合役員会にては予の原案を青山に託して去る。其の時何となく却て予の不在の方がよい様にも思はれた。

今日より秋鹵受人決定せり。

【語句の説明】 日銀松本支店長：中山豊。東京帝大卒業後、一九二一年日本銀行入行。松本支店長（一九三〇年一月～三二年八月）、松山支店長（～三五年八月）、京都支店長（～三七年三月）、発行局長（～三七年九月）を歴任した。日本銀行退行後は北海道銀行頭取を務めた。

九月二十一日 水曜

晴。晴れたれとも冷気加る。稲作の状況を見るに、穂枯れ出来半作位のものあり。イモチ多く本年の米作の不作なるを思はしむ。秋蚕は六分作位なるものあるべし。組合支所へ行く。＊＊春次郎居合せて、彼の貸金催促整理をなす。彼借金多くして如何ともし難き状態なり。

＊＊三郎の年齢を問い合せ、之を前沢俊三氏へ報告せり（電話にて）。銀行出勤したり。近來極めて閑散にて仕事少し。平沢瀧雄より一度会見したき旨申来りたれば、之に対して来る廿五日宮田にて会見する旨申送れり。

近來午後にも午前にも、書を読めは自然に居眠り出て来り。何となく夢を見て居る様な具合にて、頭取にドツカ悪くはないかと注意せられた。頭取及金田、伊那委託事件にて検事局行。

九月二十二日 木曜

雨。組合支所に行く。役場へ出頭し、吉川村長に面会して松森の樹木と道路関係に付交渉する予定なりしも、村長出勤せずとの事なれば、之を止めて十一時上飯、銀行出勤す。松森の問題は、道路工事の際父が工事設計を見て、吉郎平前の道路は東西側共コンクリート壁とし、政五郎の小作畑より土坡を以てする事に耕地委員立会の上決定し、其設計を認め松の立木二三本を伐採し助役を呼びよせて株代の交渉をなし、遂に松木を伐る事として他は邪魔にならぬと云ふ事にて設計通り工事を行ふ事としたるに、途中より工事設計を承諾なく変更して、松森中を土坡とし、杉、松等を砂を以て埋めたるにより、之の設計通り壁とせられたしと云ふにあり。

今村与一郎、丸山泰治の二人来行し、マセ口へ売りたる土地十九坪の代金を支払に来りたりと云ふ。銀行にては面白くなければとて、仙寿楼に兩人を召致して（前より此二人と会談せんと志せし故）道路の話をなしたるに、兩人はマセ口の土地は無条件に一任せられたるものなれば、坪四円五十銭にして貰い度と云ふ。マア其話は明日来宅せられたしと談して避け、夕食を共にし、妓を招きて夕食を共にし、午後七時タクシーにて帰る。松森問題を話したるに、村長より話あれば如何様にもするとの事なりし。

九月二十三日 金曜

雨晴。朝今村与一郎が来訪して、マセ口へ売った土地十九坪の代金支払にやつて来た。昨日も其支払にやつて来たが受取らず、自宅へ持参せしめたが、夜来考へた揚句一文のマケル必要はないと決心して、与一郎が是非四、五〇にマケてもらい度いと云ふたか、厳としてマケ

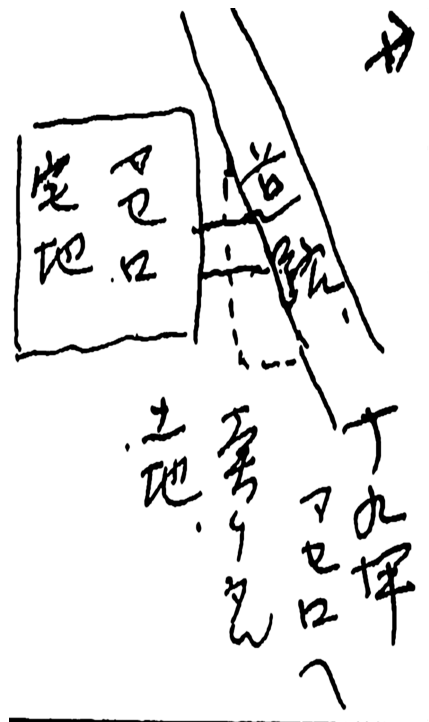
ないと云ひ切つた。併して彼はスゴ／＼九十五円を置いて行つた。領収書を書き与へた（今村与一郎は無条件でマカシタと云ふのをタテにマケヨと迫つた）。

併して予は弁天松森の道路を若し当方の請求通りやらなければ工事中止を命じ、道路委員を召集して見て貰ふと当方の決意を示した。田中宗三がやつて来た。そして地目変換を要すべき土地を見て廻つた。飯野又一の前の鶏舎は予め地主へは何の沙汰なくして建てたるものなれば、以前より一札を入れよと催促しつゝ、ありしに、呼びにやれとも来らず。漸く両三日前来て、如何にするかと問ひしに、子僧の仕事なれば子僧に話して儲からんから何とかしたいと云ひ居れり。西裡次郎作屋敷南の畑を田に変換したるもの、沢口庄太郎の馬屋等宅地としたるものを皆検分したり。御庚申の道路検分して土盛をした。村より補助を貰ひて仕事をすべく田中と太一等を連れて見る。

終日家居し夕刻釣に行く。子供等向山に行きハツタケを取り来る。社会の今日 外交探り合いなり。日本の対満態度に米の態度未決。

【語句の説明】 日本の対満態度に米の態度未決：日本が満洲国の単独承認を断行したことに、アメリカ国務省は論評を差し控えた。当時の新聞では、リットン報告書が公表されるまで態度の表明を保留するためではないかと指摘されていた。

〔図〕



九月二十四日 土曜

雨晴。支所を巡視して吉川を訪問せり。組合には理事が千代生産乾燥機を見に行く。予は座光寺組合に於ける不出荷組合会に午後四時出席せり。吉川を訪問したる要件は、村長に面会を求めしに風邪なりとて休み居り、老人と話中出て来りて面会し、「新道路開設に付、松森の箇所は設計を変更して承諾せざるに、土坡を築きて道路とし樹木を埋め立てたり。勝手に設計を変更して関係地主に何の挨拶もなきは不誠意も甚し。故に之の設計通り工築せられたし。元来老父は弁天保安林に關しては特種の注意を払い一木一草と雖も愛護して保存につとめしものなり。然るに今回等地主に挨拶なくして設計を勝手に変更し、事後より之か承諾を止むを得さらしむるに至るは不誠意も甚し。故に元の設計に復して仕事すべしと告げたるに細かい事は云はないくれ、民心險惡の時は意外の辺に及ふべしと。故に道路法式の使用を願は

る、か、或は道路の法式は売らざる様せられては如何との答に、兎に角父に話しに来るべし、又耕地惣代を一応土坡式の交渉にやつてもよいとの話あり。始末をせずして午前十一時去る。銀行出勤す。吉沢工一族来行し入担の話ありたれとも、土地の半分を銀行でとれとて話進まずして分れたり。

放課後座光寺組合に不出荷組合の会合ありて出席せり。鼎、上郷、上飯田来らず。

予記 楼町刀剣磨やに寄りしに、予の頼みたるものを盗難に会いたりと弁解し、代りの刀を磨いて預け置くべしと云ふ。

九月二十五日 日曜

〔記述なし〕

九月二十六日 月曜

晴。犀水館に原唯一、佐々木三郎、竹村清男と泊し、朝出宿して産業会館に於ける知事召集の組合長会議に列す。知事は勅語を奉読して後国家非常時に際して自力更生の要を説き、産業組合長の此際自力更生に全力を傾けられたき事を論して説き、午前中は課長等の組合法改正の要綱に付説明ありて地方裁判所長の負債調テイ法に付説明あり。之を終り午後表彰ありて後協議問題に入る。下伊那提出の件につきては原之を説明し小声にて聞こえず（昼休の間島岡と共に県庁社会課を訪問し課長に面会し又弥富属、座光寺に面会して県か非常時に際して如何にして教化に当らんとするかに付き質問したるも何の計倫〔経緯〕なし）。百瀬興政立ちて「下伊那のみは中金より然る事あるも他は其の如き事なし」と頑張り、予は奮〔憤〕慨の余り「即決採声」と

大声で呼る。知事如何にすべきかを更に問へは県に任せりと答へ、遂に葬られたり。此の問題は帰宿の上大に論せられたる処なり。

予記 長野の放送局を見、城山館に入りて休憩し宿に帰る。善光寺に参詣せり。記念館に転宿す。松下、吉沢、松島等と行を共にす。

【語句の説明】①知事召集の組合長会議：九月二十六日、長野市産業会館で第一回長野県産業組合長会議および第二八回県下産業組合大会が開催された。同大会において産業組合下伊那郡部会は、産業組合中央金庫に対し地方や組合の事情に即した資金融通の取り扱いを要望していた。

②組合法改正：一九三二年の「救農議會」で、産業組合法の改正が行われた。集落を単位とする農家小組合を農事実行組合として法的に位置づけ、これを産業組合に加入し得るようになるもので、産業組合の下部組織強化が図られた。

③地方裁判所長：原田繁蔵。長野地方裁判所長。会議では金銭債務調停法実施に関する講演を行い、その指示事項と注意事項について協議がなされた。

④負債調テイ法：先の臨時議會を通過した農村負債整理組合法（一九三三年八月一日施行）のもと、部落を単位とする整理組合による、債権者・債務者双方の互譲にもとづく負債整理が進められようとしていた。

⑤弥富属：弥富元三郎。長野県学務部社会教育主事。

⑥百瀬興政：一八六八―一九三九年。東京帝国大学医科大学別科卒業後、松本市で医院を開業し、地元の看護婦養成にも力を入れていた。一九二二年には松本信用組合（現・松本信用金庫）を設立、同組合長としてその発展に尽力した。また、従兄弟の木下尚江とともに普

選運動や禁酒運動にも参加し、一九一〇年松本市町会議員当選を皮切りに、同議員（四期）・松本市議会議長・長野県議員（三期）を歴任。一九三九年、松本市長に当選したが、現職中に死去した。

九月二十七日 火曜

晴後雨。記念館に泊して朝善光寺参詣す。松下と同行して如来の靈光に浴す。厄公御出動して沿道善男善女雲集して首を垂れ慈光に随喜す。産業会館に於て購販聯合会総会あり出席す。昨日組合長会議に召かれたるもの、多くは此会に参集せり。総会は午前十時に始まり午後一時終了せり。別に何の変わりもなく平凡に終る。講演ありたるも耳裡に入らず。知事も出席せり。午後二時半発にて下伊那出身の面々皆帰那す。汽車中に於て、総会に於て支給せられたる酒肴をひらきて飲む。原、松島、秦等と同車せり。辰野に着すれば既に日没し同車の連中箕輪屋に入りて元氣よし。午後九時飯田より自動車をかきて帰宅す。購販未収入金と未整理金と多く、殆んど其出資以上を固定せしめ経営艱難の状にあり。林檎三貫目計り買ひて土産とせり。隣猪佐雄病みて入院中なりとか云ふ。

社会の今日 産業会館に購販聯あり。

【語句の説明】 購販聯合会総会：九月二十七日、長野市内の産業会館にて長野県購買販買組合連合会通常総会が開催された。総会では、知事の訓示・会長神戸八郎の開辞の後、役員の改選、前年度余剰金の積立、余裕金の預入先銀行、定款変更等に関する議決が行われた。なお、産業会館は一九三一年一月に完成した県内初の鉄骨鉄筋コンクリートの建造物であり、県の産業組合の大会なども行われていた。

九月二十八日 水曜

雨曇。組合支所に出頭す。秋蘭受入最中なり。平和安泰種一般に悪評なるも飼育者によりては良好なるものあり。一般の世評等にすべからず。午前中組合に居りて午後銀行へ出勤す。吉沢工一族待ち掛けて予の出勤によりて一挙に仮差押財産を質権設定をなし、其の主張の通り五割を以て銀行をして譲歩せしめんとする策戦なり。併し当行は六割を主張し質権設定の如きは最も譲歩したる案なりとして、最後に余り解決グズ／＼して居たれば之にて交渉物分れとなり四、五日間を経て再交渉する事とせり。此のグズ／＼交渉夜迄かゝり未決にて散し山下と原田をして話さしむ。此交渉は到底之以上銀行として譲る事能はされは此上は吉沢方にて誠意を示さるべしと。依て山下が仲介となりて入質問題を決する筈なり。百丈山に接心会あれば銀行より直に百丈山に入る。大休老師鑒鏢として居り説得つとめつゝあり。慈味ありてよし。「鐘声七条」の見解を呈す。曰く「夏はカタビラ冬はヌノコ」。

【語句の説明】 ①百丈山：百丈山大雄寺。飯田町にある臨済宗妙心寺派の寺院。

②「鐘声七条」：南宋の無門慧開（一一八三～一二六〇年）が記した禅の公案集『無門関』に収録された、十六番目の公案。雲門文偃（八六四～九四九年）による、世界は広々として果てしないのに、なぜお前たちは鐘が鳴ると行儀よく袈裟を身につけるのか、という問いと、無門慧開による答えから構成される。

③夏はカタビラ冬はヌノコ：帷子（かたびら）は夏用のひとえの着物で、布子（ぬのこ）は冬用の綿入れ。時節はずれで無益・無意味であることを表す慣用句として「寒に帷子土用に布子」があり、「夏はカタビラ冬はヌノコ」は逆に時節に適したものを着るという意味

か。

九月二十九日 木曜

雨。百丈山に泊して朝四時半より起床静坐すれば蚊蚊来りて襲撃をうく。心地よき静坐「鐘声七条」を呈すれば立所に通過して着語を呈す。老師垂示して曰く「用兵」次に「玄沙三種病人」を透過すべく示されたり。夜坐に於ても見解を呈したるも毫も応せず。漸く佳境に入る。来り静坐するもの松江、片桐等にて久しく道友と会せされは道友と会し四方八方の閑話す。此閑話殊に快よし。銀行へ出勤したるも心は百丈山へ飛び公案脳中にあり。

島岡、松沢来行せり。午後北原団蔵来行し面会せり。尚信聯池田氏来行して金田と面会して松沢と金田と三人会飲せしめたり。午後六時百丈に入る。静坐三昧なるも始めて入門する時の如くならず心昏沈せるもの、如し。

【語句の説明】「玄沙三種病人」：禪の公案集『碧巖録』に収録された八十八番目の公案「玄沙接物利生」のこと。玄沙師備（八三五～九〇八年）による、目の見えない者・耳の聞こえない者・口の利けない者の三者に対してどう説法をするのか、という問いと、雲門文偃による答えからなる。『碧巖録』は一二二五年に成立した仏教書で、北宋初期の雪竇重顕（九八〇～一〇五二年）が編纂した公案百本に、北宋晩期の圓悟克勤（一〇六三～一一三五年）が評語を付したものの。

九月三十日 金曜

曇少雨。大雄寺接心「玄沙三種病人」を老師に呈す。不是、拙脚せらる。朝食後悠々銀行に向て去る。聯合事務所を訪問して下田に会し

て下田と作興会事務打合をなす。銀行出勤す。午前中伊那町より伊藤今朝一来行し北原の問題に付交渉あり。面会して伊藤の申分を聞く。

午後五時組合より電話あり。支所に来りて井沢竹松を召致して増沢問題に関する彼の交渉の状況を聴きたるに、三千円の器械代を向後増沢より買入るべき器械機具代を以て差引の案は大体に於て認めらるゝも、年限を切る事に於ては当方として忍ぶ能はざる件なれば、他日降旗来組の上話すべしと井沢の労を謝して分れたり。受入蘭量一万二千貫を突破す。秋蚕は一般を通して六分作と見られたり。秋桑九月中旬前は一貫目三十銭と唱へたるも以後は価立たす暴落せり。午後六時帰宅す。これは父も健康にて家内平和にして子供等喜々として戯れ心地よし。碧巖録をとり出して見る。

柿色付き松茸も出る。価百匁十五銭を唱ふ。

社会の今日 満洲使節東京入。西藏独立。

【語句の説明】①満洲使節東京入：九月二十九日、初代満洲国駐日代表鮑親澄が参事官や事務官とともに東京入りした。

②西藏独立：ベリ・デルケ戦争を指すか。一九三一年に揚子江流域で起こった僧院間の抗争は、四川・雲南の支配を進める中国と服属を拒むチベットとの戦闘に発展した。チベットのダライ・ラマ一三世はイギリスや日本の援助を頼ろうとしたが効果は薄く、三二年七月に中国軍が長江の左岸を制圧し、独立チベットの名で反乱を起こした中国側のチベット人も投降すると、同年一〇月に休戦条約が結ばれ国境が確定した。